

東京プロジェクトスタディ1

続・東京でつくるといふこと

「わたしとアートプロジェクトとの距離を記述する」

What it means to create in Tokyo 2

Tokyo Art Research Lab「思考と技術と対話の学校」の一環として行われた「東京プロジェクトスタディ」。

2019年度に立ち上がった3つのスタディのうちの一つがこの「スタディ1 続・東京でつくるということ」でした。

本冊子はスタディの活動記録およびメンバー全員の「東京でつくる」を巡るエッセイをまとめたものです。

東京プロジェクトスタディ1 続・東京でつくるということ(概要).....	02
わたしとアートプロジェクトとの距離を記述する(参加者募集のメッセージより)	
ナビゲーターメッセージ「鹿、山、わたし」石神 夏希	
スタディ活動記録(レポート:高須賀 真之)	
第1回:2019.8.24/はじまりは、からだの自己紹介.....	04
第2回:2019.9.4/「問い」に気づく.....	06
Column「しっくりくる場所」高須賀 真之.....	07
第3回:2019.9.7/フィールドワーク.....	08
第4回:2019.10.3/進捗共有会.....	10
第5回:2019.10.26/Oeshikiを終えて.....	10
第6回:2019.11.23/ゲストとの対話① 韓 垂由美さん.....	11
第7回:2019.12.7/ゲストとの対話② 照倉 敬聡さん、長島 確さん.....	12
Column「東京でつくる前に」石神 夏希.....	13
第8回:2020.1.11/最後の活動日.....	14
第9回 全体共有会:2020.1.19/朗読「続・東京でつくるということ」.....	15
Column「私の、あなたの、立っている場所からスタディがはじまる」嘉原 妙.....	16
スタディ1メンバーによる「東京でつくる」を巡るエッセイ集.....	17

わたしとアートプロジェクトとの 距離を記述する

アートプロジェクトは誰のもので、何を目指すのか。

多くの人が現場で直面するこの問いについて、

「記述する」ことを通して考えます。

さまざまな立場の人が関わるプロセスそのものが作品として提示されるとき、

鑑賞者はもちろん記録者(カメラマン、ライター、編集者)や批評家も、
純粋な観察者ではられません。

こうした場面ではしばしば、文化人類学等で用いられる

「参与観察」という手法が参照されますが、

その際、観察者が自身の背景や身体性と向き合い、
対象との距離を明らかにすることが大切です。

つまり「プロジェクトを観察・記述する」と同時に

「自分を観察・記述する」が必要になるのです。

このスタディでは、2019年秋に東京で行われる

アートプロジェクトを事例として取り上げ、

参加者は「観察者・記述者」として現場に立ち会います。

異なる背景を持つ参加者同士の視点を交換しながら、

一人ひとりが「東京でつくること」について考えていきます。

Navigator 石神 夏希

(劇作家/ペニン結構設計/NPO法人場所と物語 理事長/The CAVE 取締役)

「鹿、山、わたし」

大学生の頃、私の在籍していた美学の専攻では「芸術作品を記述する」という必修科目がありました。絵画や彫刻などを分析して論文を書くために、まず作品を言葉で描写するのです。課題として取り上げられたのは、たしか水墨画か何かだったと思います。「前景には鹿が描かれ、後景には山が……」というように、描かれているものを言語化していくのですが、私は一行も書けませんでした。なぜか？ 私には、鹿と山のどちらを先に書けばいいのか、分からなかったからです。

より正確に言えば、その順番が私が決めてしまうのは、あまりに恣意的だと感じました。だって、てにをはひとつでも、与える印象はずいぶん違います。絵画を描写した私の言葉が、むしろ絵画そのものを決定的に損なってしまうように感じて、怖くて書き始められませんでした。(手法そのものを批判しているわけではありません。私の幼さや拙さが、むしろ要因としては大きかったわけですが)

だからでしょうか。数年後に文化人類学、特に「参与観察」というフィールドワークの技法を学んだとき、新鮮な驚きとともに「あ、そうだよな」とホッとしました。

観察する自分を「透明なまなざし」ではなく、肉体を持つ存在として視野に入れること。対象が(絵の鹿ならともかく)生きている人間であれば、対象と観察者である自分とが影響を及ぼし合わずにはいられない、と認めること。そして、自分は常に変化する「不確かな観察者」であるという前提から始めること。

昨年から続くこのスタディでは、「東京でつくる」と「東京で暮らす」との関わりを通して、参加者それぞれの「いま東京でつくる理由」を考えています。今年は特に、具体的なアートプロジェクトを事例として、参加者の皆さんそれぞれが観察し、記述することを一緒にやっていきます。

ただし、アートプロジェクトや作品の記録は最終目的ではありません。「書く」を通じて「見つめる」ために、さらには「見つめている自分(の肉体)」を発見するために、書いていきます。初めて集まるメンバー同士、共通言語をつくるため、10月には私が取り組んでいるアートプロジェクトも体験していただけます。ですが実際に「書く」対象としては、自分で主宰していたり、興味を持っていたりするプロジェクトを選んでいただいて構いません。

いずれにせよ、手ぶらで来て大丈夫です(銭湯みたいですね)。第1回と第2回では、たくさん話をする場を持ちます。そして、それぞれが何を考えているのか、何を感じているのか、今回は何を「書く(見つめる)」のかを一緒に考えていきます。私も先生や講師ではなく、自分の思考や過程を皆さんに開いて、もやもや、うろうろしていくつもりです。そんな迷い道・回り道を、一緒に歩いてくれる仲間をお待ちしています。

(スタディ1 参加者募集のメッセージより)

第1回スタディ：2019.8.24

はじめは、からだの自己紹介

初回であるこの日は、まずは「ことばによる自己紹介」の前に「からだの自己紹介」として、身体を使ったワークショップを行った。

部屋のなかを移動してみんなにとって「しっくり」くる空間をつったり、歩く速度を速めたり遅めたりしながらみんなの呼吸にあわせて歩いたり。「対角線上の出会い」というワークでは、2人1組になってそれぞれ一本の線の両端から歩いていき、相手と線上ですれ違って反対側へ到達する。ナビゲーターの石神夏希から「自分がいまどう感じているかを大事にしてほしい」という声。進みたいのか退きたいのか、相手とどのくらいの距離感でいたいのか。ただまっすぐに進むのではなく、自分の気持ちを大事にしながら行き方を決めていく。ことばを用いずに、相手との距離感や自分のなかにある感覚と向き合う時間だった。

「自分のスピード感に

まちも合っているのかもしれない」

(タカノ)

次はことばを使った自己紹介。「自分の名前の由来／今日起きてからここに来るまでで印象的だった出来事／理想の歩き方or一番古い記憶」の3つの項目をメンバー一人ひとりが語っていく。



「進みたいのか退きたいのか、
相手とどのくらいの
距離感でいたいのか」(石神)



今度はメンバー同士でインタビューを実施。昨年のスタディ1でも行ったやり方で、お互いインタビュアー／インタビューーとなって順々にインタビューをしていく。

「最初に東京に来たときは
“なんてまっ黒なんだろう”と
思って(笑)」(中村)

「書きたいっていう
衝動はあるのに、
うまくことばに
できなかったり、
逆にことばにしたら
消えちゃいそうとか、
ことばにしたら
いけないだろうな、
ということと、
どう向き合えば
いいのか」(佐藤)

スタディ1の今後の方針をメンバーみんなで確認。昨年のスタディ1では毎回エッセイを執筆していたが、今年は毎回ではなく、半年で一本のエッセイを執筆することが最終目標。とはいえいきなり書くのではなく、執筆の前段階として非公開のTumblrを用いてブログを随時書いていく方向に。「書く」ことを重ねていくことで、自分自身が疑問に思っていることや無意識に気にかけていた——そしてそれはそのひと自身を突き動かしているであろう——「核」のようなものに触れることができるのかもしれない。スタッフ含め総勢10名によるスタディがあらたに動き出した。

第2回スタディ：2019.9.4

「問い」に気づく

第2回では、実際にエッセイを書くための「企画書」をみんなで作成することを目標に、ディスカッションやフィードバックを行った。

メンバーみんなでグループディスカッションを行った。3人1組になって、1人5分ずつ喋るというのを、組み合わせを変えながら3セッション。その際、①何について書きたいか→②何について書きたいか/何のために書きたいか(なぜこのスタディに参加したか)→③何について書きたいか/何のために書きたいか/書いた結果どうなってほしいか、というように、セッションを重ねる毎にディスカッションする内容を増やしていく。ひと(他者)と会話を重ねることで、自分のなかの芯(=問い)に気づいていく。



「やりたくないことをやらなかったためにどうするか」(富樫)

「移動している間と“もやもや”って似てるな、って」(今井)



「企画書」の執筆タイム。石神の用意した企画書(ワークシート)には、「タイトル」(今後Tumbler上にメンバーが投稿していくブログの連載記事にタイトルをつけるとしたら?)、「テーマ」(「問い」をひとことという?)、「概要/背景/目的」(何について書くのか?なぜ書くのか?書いた結果どうになりたいか?)、「どんなリサーチをするか」(会いたい人/行きたい場所/読みたい本etc…)といった質問が記載されており、それらに答えるかたちでワークシートを埋めていく。



「なぜわたしはこれが好きなのか、とか、目を離せないのか——それを思って、これからどこへ向かっていくのか」(矢内)

「東京」を見ていく/観察していくときに、「ちゃんと見る」って何なんだろう?という疑問も出る。メンバーそれぞれが抱えている“もやもや”を無視するのではなく、その“もやもや”と向き合い、“もやもや”を通して「東京」を見ることが、あるいは“ちゃんと見る”ことにつながっていくのかもしれない。

昨年度、一参加者としてかかわったスタディ1に、今回はスタッフとしてかかわることになった。「スタッフ」という慣れない立場に最初は戸惑いを覚えたり、距離の取り方に悩んだりしたが、回を重ねていく毎に場慣れしていったのか、それとも図々しくなったのか、次第に自分にとってほどよいポジションに落ち着いたように思う。振り返ってみれば、スタディの初回に行ったワークショップが「しっくりくる場所をみつける」というもので、どうやら半年間かけて自分の“しっくりくる場所”や“佇み方”をみつけたのかもしれない。

とにかくことばを積み重ねていくこと——「書く」だけでなく、書かれたことばに耳を傾け、お互いを感じたことを共有し合うということを大切にされた半年間だった。昨年度のスタディ1は月1回のディスカッション毎に1本のエッセイを書く（合計5本!）というもので、まるでシャトルランのように熱量を上げながら書くという行為を反復していったが、今回は半年間で1本の「エッセイ」を書き上げるというもので、書く頻度は前回に比べて減った一方で、その分長いスパンでメンバー各自が抱える一つひとつのことばに向き合っていた。それはまるでひとつの「種」を大事に抱えながら芽吹くの待つのに似ていた。

ことばを書く、ということは、とても孤独だと思う。だけど、ことばはまた、ひらかれていく可能性も併せ持っていると思う。土のなかでは孤独に耐え、その姿は目にみえないが、土からひとつ芽が出れば、なんらかのかたちで空間にひろがっていく「種」のように。空に向かってすすくと伸びて花ひらくものもあれば、地面を這いずり回ったり、壁にぐるぐると絡みついてみたり、咲いてはみたものの花でなかつたりするものもあったりする。あるいはけっきょく芽吹くことなく、地中で朽ちていってしまうものもあったりする。それでもそれはたしかに存在していて、たしかになにかとかわりを持っている。個人個人が抱えることばとは、そういうものなのだと思う。

「これまでと違った書き方を試してみたい」——エッセイを書いていくなかで何人かのメンバーから出たこのことばは、今回のスタディ1の特徴をよく表していたと思う。実際、これから読んでいただく（あるいは、もうすでに読まれた）各メンバーのエッセイは、形式も書かれていることもとても自由だ。その自由さは、それぞれの“佇み方”や“芽吹き方”を試行錯誤するプロセスだったともいえるのかもしれない。“しっくりくる場所”をみつけにくい都市や時代のなかで、自分の居場所や立ち位置を見失わないための、ささやかな——それでいて祈りにも似て切実な——抵抗とでもいうような。

第3回スタディ：2019.9.7

フィールドワーク

第3回では、フィールドワークとして豊島区の雑司が谷を探索した。

雑司が谷は池袋駅の南東に位置し、古いまち並みがいまでも残る場所だ。毎年10月16日～18日に雑司が谷で行われる「御会式」は、もともとは日蓮聖人を供養するための仏教の行事として行われていたが、雑司が谷で出土したという鬼子母神像への信仰といつか溶け合い、「鬼子母神 御会式」として、日蓮宗に限らずさまざまな信仰をもつひとを受け入れながら、江戸時代から人々に親しまれ連続と続いてきた「お祭り」だ。石神夏希は東アジア文化都市2019のプログラムのひとつとして「Oeshiki Project」を立ち上げ、雑司が谷や豊島区内の外国人居住区などのリサーチを行うとともに、プロジェクトの集大成としてツアーパフォーマンス《BEAT》を御会式と同時期に開催する。スタディメンバーはアートプロジェクトを観察・記述するためのケーススタディとして《BEAT》に参加することになっているが、その前に雑司が谷のまちを一度歩いてみることで、「どんなくまち」で「どんなくアートプロジェクト」が行われるのかの手掛かりを発見することが、今回のスタディの目的だ。



「新と旧が入り乱れて、いまがほんとにいろいろなと変わっていく途中なのかな」(朝山)



御会式の最終目的地である法明寺と鬼子母神堂を目指す。途中で老眼鏡が壁にびっしりと敷き詰められた謎のお店の前を通ったり、お寺で猫と遭遇したり。鬼子母神堂では地域のひとに交じってメンバーもお参りをする。



「鬼子母神がある種のアジール（聖域／自由領域）のようになっていて、だれのものでもないしみんなのものという空間、みんなのこころのセンターみたいな空間になっている」（石神）



ケヤキ並木を抜けて、都電荒川線沿いを歩いて大鳥神社へ。この日はちょうど大鳥神社のお祭りをやっていて、神社にたどり着くとこどもたちのお神輿が奉納される所だった。境内の檜舞台では神楽の演奏が行われている。線路を越えて弦巻（つるまき）通りを歩いていると、通りかかった公園でおじさんに「コーヒー飲まないかい？」と声を掛けられる。どうやらコーヒーをふるまってくれるらしいと思い寄ってみると、なんと自分でコーヒー豆を挽かないといけないという。

「お祭りにはその場のそれぞれの“居かた”があって、なにかが許されている状態がある気がする」（嘉原）



「お祭り」とは日常からかけ離れた特殊な行為なのではなく、日常や普段のコミュニティの地続きとしての時間としてあるのだろうか。そして、まちに付き、まちを記述することは、自分の生活の時間がまちの日常の時間に組み込まれていく（なじんでいく）こととつながっているのかもしれない。

第4回スタディ:2019.10.3

進捗共有会

ナビゲーターの石神がOeshiki Project《BEAT》(10月16日~18日)制作のため、次回スタディまで2か月近く間が空くことから、この日は番外編としてメンバーだけで集まってそれぞれの進捗状況を報告し合う「進捗共有会」を実施した。



Tumblrに複数のブログをすでに書いているひと、まだ書いていないひと、そもそもTumblrをどう用いるべきかまだ悩んでいるひと。ことばとの距離の取り方はさまざまだ。

『書く』という行為がスタディ1の軸になっているが、
『書く』ことを重ねていくことが、
“だれか”にことばを届けることにならないだろうか(高須賀)

第5回スタディ:2019.10.26

Oeshikiを終えて

「誰かと時間を共有することは、
時間はかかるし
手間もかかるけれど、
そうじゃないと
出会えない」(嘉原)

Oeshiki Project《BEAT》を挟んで行われた第5回スタディ。この日は前半、《BEAT》に参加したメンバーの感想をシェアすることから始めた。

後半からは、メンバーそれぞれの進捗状況を報告し合った。共有会後に行ったフィールドワークについて報告したり、自分が抱えているもやもやについて共有したり。具体的な目標がありつつも、それに対してまだはっきりとことばに成り切れていなかったり、設計が曖昧な状態だったりするメンバーもいた。スタディも後半に入り、いよいよエッセイの執筆が始まる。



「わたしが思っていることをみんなに経験してほしいというのはエゴで、それを飛び越えて体験するひともいるし、その可能性を殺してしまう方が嫌だから、なるべく手放して可能性を広げたい」(石神)

「物事の速度を自分のからだの感覚で
数えたりとかはできないか」(今井)

第6回スタディ: 2019.11.23

ゲストとの対話 ①

東京で生まれた・育った等ルーツを持ち、東京と長い時間をかけて関わりながら「つくる」と「暮らす」を実践してきた経験を持つゲストとの対話。その知見や思いをシェアしていただきながら、重ねてきたディスカッションを深めました。

スタディ1も残すところ3回となったこの日は、ゲストとして韓亜由美さん(アーバニスト)をお招きした。韓さんは石神がディレクターを務めた《BEAT》にも市民パフォーマーとして参加しており、自分と他者との関係性を模索する活動を続けている。

「〈まちがひとを育てる〉〈ひとはまちに育てられる〉ということもあるし、〈ひとがまちをつくる〉でもある。そのふたつのキャッチボールというか、その関係性をどう豊かにするのか、そういったお金だけではない交換を耕していきたい」(韓さん)



「別のものかもしれないけれど、一緒にになにかを発見したりできるかもしれない」可能性をひらいていくこと。韓さんの活動には、まちや個人がどのようにかかわり合い、つながっていくのか、そういったアイデアが詰まっていた。

「自分を否定しちゃいけないし、自分の人生を生きないとつまらない」(韓さん)



スタディメンバーである朝山紗季が関わっている「In Search of Colors」プロジェクト参画者でベルリン在住のアーティスト村上亘さんと、このプロジェクトをサポートしている会社代表の小林丈史さんが、この日、見学に来ていたこともあり、プロジェクトの紹介もしていただいた。アーティストの村上さんの視点を通して撮影した写真は、日常の風景から見落とされる東京の景色を捉えていたのが印象的だった。

第7回スタディ：2019.12.7

ゲストとの対話②

この日はまちを転々としながら40年ほど東京に住みつけ、いまは京都に在住されている熊倉敬聡さん（写真右）と、フェスティバル/トーキョーのディレクターであり、東京アートポイント計画にも「アトレウス家」「つくりかた研究所」で参加されていた長島確さん（写真中央）をゲストにお招きした。

長島さんは、「歩く」という行為は東京においてパーソナルスペースを確保する一番確実な方法だとも語る。



石神からの「東京の状況に対する危機感はどうなのか？」という問いかけに対しては、長島さんは「巨大すぎ、かつ老いて孤立している」とことだと回答。

「自分のなかで目につくポイントっていうのは、東京のなかでも生活感がすごく溢れていたりしているところとか、そこにひとはいないけど、だれかが手を加えたんだろうなとか、これだれかが失敗してやっちゃったんだろうなとか、人間らしきみたいなのがみえてるのが好き…やっただひと生活感や姿が想像できるのがおもしろい」（佐藤）



「毎日だれかに会って、インプットをして、それでも一日を終えて、自分に戻る時間、みたいなものが電車のなかにある」（今井）



熊倉さんは突然時間が空いたりすると、明治神宮の裏に行かれるという。その空間を「東京のなかの野生みたいな場所」、「ぼかっと空いた巨大な空き地のような場所」だと語る熊倉さん。目に見えない動線や規律の網の目からいかに逃れるかを考えることもまた、「東京」を捉える重要な視点だ。



エッセイのフィードバックの場でもやはり「歩く」「東京を身体化する」ということがポイントになっており、まち（におけるアートプロジェクト）を考える際に欠かせない要素なのだろう。いよいよ次回でスタディは最後となり、エッセイも完成となる。

『続・東京でつくるということ』は、2018年度に実施された『東京でつくるということ』の続編です。これは東京でアートプロジェクトを立ち上げるために「東京で暮ら（し直）す」ことを選んだ私、石神夏希の個人的な戸惑いを出発点に、メンバー一人ひとりが「書く」という行為を通して「東京でつくる」を巡る思考と対話の旅を重ねるスタディです。

ここ十年近く、国内外のさまざまな土地に滞在して、そこで暮らす人々と演劇をつくってきました。そんな私にとって「東京」は、物心つく前に離れた生まれ故郷であると同時に、もっとも遠い場所でもありました。

2020を目前に控えたこの数年間に関しても、いざ「東京でつくる理由」より「東京でつくってしまう力学」が働いていて、私もまたその一端を担ぐために、とくに縁が切れたはずのふるさとへと呼び戻されたのは明らかでした。アーツカウンシル東京の嘉原妙さんが「つくる手前で立ち止まる場所」として与えてくれたこのスタディは私にとって、そんな力学や磁場に呑み込まれずに、何とか正気を保つための命綱だったようにも思います（結果として正気でいられたのかは分かりません。酔っ払いは「酔ってない」と言い張るものですから）。

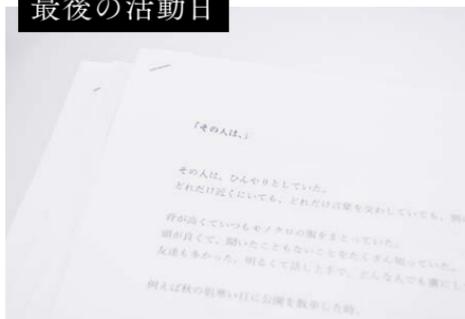
スタディでは「東京でつくる」をお題に、それぞれが自分のテーマを決めて、一人ひとりで書き進めました。集まるときは互いの書いた文章を読み合い、一本ずつじっくりと話し合っ、また持ち帰る、という過程を繰り返しました。少しずつブラッシュアップしていった人もいるし、毎回ゼロから書き直した人もいます。それぞれの歩みで「半年かけて書き上げた一本」を集めたのが、この冊子です。

「書く」ことにこだわったのは、それが孤独な作業だからです。私は自分ひとりしか乗れない乗り物のような、最小単位の「東京でつくる理由」を探していたし、メンバーの皆にも見つけてほしいと思っていました。小さいからこそ誰も乗取れない、誰も奪えない。そんな小さな理由が集まって都市はつくられていると思うし、そういう小ささしか、この都市を幸福な場所にはできないと思ったから、です。

今年は10名の書き手のエッセイが収められています。いまこれを読んでいるあなたが2020年にいるのか、それとも、もっと先の未来にいるのか。私には知るすべもありませんが、ぜひじっくりと、目を通してみていただけると嬉しいです。

第8回スタディ：2020.1.11

最後の活動日



最初のエッセイから大きく書き方が変わったひと、書き方を踏襲しながらことばを掘り進めていったひと、対話の形式や詩のような書き方で書いたひと。それぞれの「核」「書く」という行為を掘り下げながら、自由にことばを紡いでいた。

「作家がいることで、

自分も一緒にいるこの世界の
見え方や視野が少しひろがったり、
そのひとに憑依して見させて
もらったりできる」(嘉原)

「ことばにすることでなくなってしまうこともある。書かなかったことや書けなかったこと、自分のなかにある秘密を持つことが良い。書いていないこと、ことばにいまはしたくないものを大事にする姿勢がこのスタディではあった」とスタディマネージャーの嘉原が最後に言ったように、語らなかつたこともまた、「記述する」という一連の行為のなかに含まれていたし、書かれなかつたことばが書かれたことばをより一層豊かにしていたのだと思う。

いよいよスタディ 1最後の活動日。これまでのスタディを経て書き上がった各メンバーの最終エッセイをじっくりと読む時間を取り、フィードバックを行った。

「安全で便利で清潔なまちが
もしひとだったら超怖い：
ほんとは匂いもあるし、
良いところも悪いところもある。
そういうふうにみることで
まちとの関係性も変わってくる」(石神)



「『東京でつくる』ということに
意味を見出すのか、可能性を
求めるのか、なにを探すのか、
なぜつくるのか」(タカノ)

第9回スタディ／全体共有会：2020.1.19

朗読「続・東京でつくるといふこと」

1月19日に行われたスタディ全体の共有会。3つのスタディが集まり、この半年間実践してきたことを報告し合った。スタディ1は、各メンバーが執筆したエッセイから抜粋し、執筆者以外のメンバーが朗読することで、メンバーそれぞれの「東京でつくるといふこと」という個人的な試行錯誤の過程を分かち合い、支え合ってきたスタディ1の様子を表現してみるというパフォーマンスを行った。



共有会当日、石神から台本をシェアされる。石神から渡された台本には、「あせらず、心の準備が整ってから読み始めること。沈黙を恐れない」「普段よりも、1.5～2倍ゆっくりめに話す」「感情をこめたり、演技したりする必要はない。等身大で、自分の声を自分の耳でしっかり聞きながら、ことばを味わうように読む」といった、石神からのことばが添えられている。相手との間や自分の呼吸を大事にすること。このスタディで大切にできたことが、ここでも表れている。



スタディ1のメンバーはこれまで、お互いに「道連れ」のようにして、それぞれのことばを探り出し掘り出す過程を、受け止め合い、応答し合うことで、お互いに伴走してきた。そうやって書かれた文章が、この共有会で「空気を震わせ、音になる」ことを通して、世の中に放たれていく。

メンバーたちが書いたことばが「声」に出されていく。ただ決められた順番で読み進めるのではなく、また、書かれたことばをそのまま流すのではなく、息遣いやリズム、余韻、ことばとことばの間に生まれる余白……そういったものもまた相手に手渡されていく。ことばが「声」に出され、その「声」が手渡されながらつながることで、ことばは解像度を上げ、輪郭を成し、共鳴し合い、ひろがりとなって、場にひらかれる。手渡されることで、ことばはそれを書いたひとだけのものではなくなり、関係性のなかで生き始める。ことばはひとりでは成り立たないのだと、メンバーが朗読する声に耳を傾けながら、強く思う。

「私の、あなたの、立っている場所からスタディがはじまる」
—— 嘉原 妙

「あせらず、心の準備が整ってから読み始めること。沈黙を恐れない」。

台本に書かれたこの一文に目をやって、よし、と一呼吸して読みはじめたというのに、あの日、私の声はたしかに震えていた。1月に開かれた東京プロジェクトスタディの全体共有会でのこと、スタディ1のメンバーが、それぞれに書き上げたテキストのなかから文章を抜粋し、書いた本人ではないメンバーが朗読をすることになった。「書いた人へギフトを手渡すように、言葉を声(音)にして贈るイメージで」。あの日、一番手として私が声にしたのは、石神夏希さんの『東京ステイ日記』だった。

ちょうど全体共有会の1週間前は、スタディ1の最終日だった。そこには、約半年間のスタディを経て書き上げられた10本のエッセイが集められていた。各自が書いたエッセイを皆で読み、それぞれの書き手に他のメンバーが言葉を返す。それは、この半年間、かたちを変えながらも、ずっと行われてきた光景だった。視点と言葉の交換が、いつものように繰り返し、繰り返し、重ねられた。あるときは東京のまちを連れ立って歩きながら、あるときはゲストを交えて議論しながら、そしてこの日と同じように、書いたその人とその言葉の隣で耳を傾けながら。そうやって他者の背景に触れ、戸惑い、もがきながらも思考しようとする姿をお互いに共有し、スタディ1は、安心して迷いながら思考できる場所になっていったのだと思う。

あの日、石神さんの言葉を読む自分の声を聞いたとき、その言葉の背景や行間に滲む想いが走馬灯のように浮かんで、思いがけず胸がいっぱいになった。それは、その後が続いたメンバーの朗読のときにも。落涙しそうになって、ぐっと耐えていたのは内緒だけれど。それだけ、切実にメンバーの経験や思考をともにしていたのだと気づかされた。

スタディ1は「書くこと」を通して、自らの思考の芯部に触れようすること、さらに今年は、自分の立ち位置や身体に注意を向けて書くことを心がけてきた。本書には、10人の書き手の、迷いながらも自らの現在地を探り、考え、言葉にし続けた態度と、「道連れ」のようにお互いの思考に伴走した跡が見てとれる。私はどこに立ち、何に向き合おうとしているのか。ふと迷子になりそうなとき、私はここに綴られた言葉や書き手に会いにページをめくるだろう。そして、きつとまた励まされて、自分の立脚点をたしかめるのだと思う。そこからまた、私の、あなたの、スタディがはじまっていく。

続・東京でつくるということ

エ
ッ
セ
イ
集

石神 夏希	18
朝山 紗季	22
佐藤 しずく	28
タカノ レイ	34
今井 亜子	42
高須賀 真之	48
富樫 朱梨	56
中村 須美子	62
矢内 純子(すーすー)	66
嘉原 妙	82

本スタディでは、「わたしとアートプロジェクトとの距離を記述する」というテーマで、メンバーそれぞれが「何について書きたいのか」を問い直し、探し始めるところからスタートしました。最終的には「東京でつくる」を巡って、各自の思考や経験を言葉にし、自らにとって切実な「何か」を確かめようと各自が記述してきたように思います。ここにおさめられている「エッセイ」一つひとつには、半年間もやもやを抱えながらも諦めずに思考し、言葉にし続けた、一人ひとりの豊かな「スタディ」の時間が詰まっています。

石神 夏希

本スタディのナビゲーター。このコーナーでは石神の視点で、各書き手の個性や今回の取り組み、スタディでの様子等を紹介しします。エッセイを読んだ感想や、個人的なメッセージになることも。著休めにどうぞ。

東京ステイ日記 「All My Loving」

東池袋のオフィスを出て、足早に池袋駅へと向かう。数ヶ月前まで何度も通った道だけど、多分もう、あまり来ることはないだろう、と考える。グリーン大通り、南池袋公園、タカセビル。指差し確認するつもりはなくても、「舞台」になった場所はどうしても目に入ってくる。バスロータリーからそのまま駅構内を抜けようとして、足が止まった。迂回してパルコ脇の、北口の地下道に入る。以前は「暗い・汚い・怖い」と悪評高かった半地下の空間はすっかりカラフルに明るく生まれ変わり、身綺麗な若者たちが軽やかな足取りで行き交っている。数ヶ月前、この道を何度も何度も行き来した頃はまだ工事中で、いつも以上に狭苦しい空間を、誰もがお互いに避け合うように、でも避けきれずに肩をぶつけ合って歩いていた。不便だったし雰囲気も穏やかではなかったけれど、偶然、知り合いと行き合うこともあって、池袋駅なんて乗降客数世界2位とか3位とかなのに、不思議ではなかった。きれいになった地下道は快適だけどどこか取り付く鳥がなくて、あんな偶然はもう起こりそうにないと感じてしまう。

西口の地上へ出ると、ガードレール脇で白髪のおばあさんが中国語の新聞を売っていた。駅前広場ではおじいさん二人がダンボールを敷いた上に差し向かいで、将棋を打っている。だけど私の目には、どんな景色が映っても、どちらの方角を向いても、今年このまちで出会った人たちの残像が蘇ってしまう。もう皆はここに

はいないし、きっとこのまちであんなふうと一緒に過ごすことは二度とない。歩いているだけで失恋したような気持ちになってしまうので、いつも行き詰まった時にひとりで考え事をしに来た駅前の喫茶店に入った。ほんの数卓しかない禁煙席に座っていても、みるみる服に煙草の匂いが染み付いていくのがわかる。でも、どうしても我慢できなくなるまでは、ここに居たかった。

「東京でつくる」ために、このまちに引越してきた。たった一年半だけれど、暮らしても仕事も私生活も、ほとんどの時間をこのまちで過ごした。この数年は旅暮らしで、国内外いろいろなまちで「つくる」を試みてきたけれど、いつも遠くから通って滞在を繰り返すスタイルだった。その距離とタイムラグが自分の創作には合っていて、現地に住むという選択肢があることはわかっている、自分が選ぶことはない、と思っていた。適切な距離を保つことが、数少ないポリシーのひとつでもあった。

だから「東京でつくる」プロセスとして「東京で暮らす」ことを決めた時、本当にいいのかという迷いもあった。作家として、このまちでの仕事を引き受けたとき、求められる結果に対して与えられた時間が短すぎたことや、父が倒れたことなど、いろいろな偶然が重なった。でも結局のところ、それらは言い訳に過ぎなくて、誰のためでもなく私は私のためにそれを必要としていたのだ。このまちを豊島区でも池袋でも雑司が谷でもなく、あえて「東京」と呼んで、自分の日常生活を通して「上演」してみる。その大きすぎて掴みどころのないフィクショナルな場所を、身の丈で引き受けてみる。今、振り返ればそれは、これから一年間は食べる時間も眠る時間も、自分の暮らしをすべて「上演」として行う、ということだったと思う。そしてそんな生活は私にとって、思い切っていえば、この上なく幸せな日々だった。もちろんプレッシャーやストレスも、辛いこともあった。でもそれらすべてを演劇に昇華できる暮らしは、すごく恵まれていたと今なら思う。演劇ばかりやっていて、「暮らす」をどうしたらいいかわからないコンプレックスがあったから、なかなか認められなかったけど。

だけど今、改めて自分に問い直す。その結果、私は何をつくれたのだろうか？ つくれなかったものも、当然あるはずだ。つまり、「私は東京で、何をつくりたかっ

たのだろうか?”

煙草の匂いにいよいよクラクラしてきたので、喫茶店を出て駅へと向かう。地下鉄に乗れば私の家のドアまで20分かからない。だけど今日はもう少し、時間がほしかった。イルミネーションが瞬いて、透明なドームみたいな近寄りがたさを放つ西口公園を横目に見ながら「びっくりガード」を通り抜け、無意味にジュンク堂に寄り道して、東通りに入る。雑司が谷の、しんとした気配が近づいてくる。

答えは案外、すぐに見つかった。だけど、言葉にするのは抵抗があった。簡単すぎるし、普通すぎるし、弱虫みたいだから。イヤホンではポール・マッカートニーが『All My Loving』を歌っている。ビートルズをちゃんと聴いたのは、いつぶりだろうか。無趣味な父について、私の知り得ている数少ない情報のひとつが「熱狂的なビートルズファンだった妻の影響でビートルズが好きになった」なのだ。だから余命宣告があった時、赤盤と青盤をダウンロードして、ラジカセに入れて病室に持っていった。ほとんど喋れなくなった父がラジカセに合わせて『イエスタデイ』を口ずさんだとき、私がこの曲を聴ける日はもう一生来ないんだろうと思った。きっと泣いてしまうから。

Close your eyes and I'll kiss you

Tomorrow I'll miss you

Remember I'll always be true

And then while I'm away

I'll write home everyday

And I'll send all my loving to you

“THE BEATLES "ALL MY LOVING" (作詞 John Lennon/Paul McCartney) より引用

父のベッド脇にただ座って、赤盤・青盤を通して聴いた。生きているうちしか、人間はこういう時間を誰かと一緒に過ごすことはできないのに、私たちはあまりにも簡単にそういうことを忘れてしまう。目の前にいる誰かと、ちゃんと「一緒にいること」を怠けてしまう。並んで歩いたり、音楽を聴いたり、なんでもないこと

を喋ったり。そういうのは全然「日常」なんかじゃなくて、一瞬一瞬が奇跡なのに、そのことに気がつくのは難しい。頭でわかっているけど、たまに気がついて、川に落としたり物をしたみたいに、気づいた瞬間にはすでに手を離れていて、一瞬で流れていってしまう。

こんな普通の、当たり前のことをそのまま書くなかって、なんて能がないんだろう、と思う。私は作家じゃなくなっちゃったのかもしれない。だけど私はこの一年半を通して、演劇という私に許された手段で、このまちで偶然出会ってしまった人々が「一緒にいる」奇跡をつかまえられる時間と空間をつくりたかった。自然に恵まれた田舎でもなく、何百年も続く営みが刻まれた街並でもなく、こんなにも烈しいスピードで日々書き換わり、風景が忘れられていく都市で、その「当たり前の尋常じゃなさ」を確かめたかった。

私は東京を、他人事にして通り過ぎたくなかった。このまちに対して私や誰かが感じている疎外感を、そのままにしたくなかった。すでに起こってしまった偶然が起こった現場まで立ち戻って、もう一度、奇跡として引き受け直したかった。だって、何も憶えてないけれど、東京はかつて私の家族が暮らしていて、私の生まれたまちなのだ。

都電沿いの道をずっと下って、鬼子母神前から新宿駅行のバスに乗った。根無し草の私にとって、こんなに知ってる人の多いまちは他にないけど、夜だし誰にも行き会わなかった。なかなか終わらない線路の工事現場にはいつも警備員が立っていて、通行人を誘導したり、声がけをしたりしている。彼は、名前も知らない私に向かって「こんばんは」と言った。イヤホンで音楽を聴いていたから一瞬遅れたけど、私も、名前も知らない彼に「こんばんは」と答えた。でも彼の目はもう、どこか別のところを見ていた。大事な瞬間は、すでに過ぎ去っていた。

Profile

石神 夏希 (いしがみ・なつき)

劇作家。東京都練馬区の江古田で生まれ、神奈川県鎌倉市の海と山のはざまで育つ。横浜を拠点に劇団を立ち上げた後、現在は国内各地や海外で滞在を重ねながら、都市やコミュニティのオルタナティブなふるまいを模索する演劇やアートプロジェクトを手がける。

朝山 紗季

朝山さんが現在進行形で関わるプロジェクトISOcを記述し、同時にISOcが鏡のようにこのスタディを現在の東京の中で映し出してくれたこと。きっと、数年後にものすごく「効いて」くるような気がしています。

Introduction :

現在、東京でつくるといふこと

現在、ある一人のアーティストのプロジェクトをサポートしている。

アーティストの名前は村上亘。東京の都市を駆け回り作品制作をする彼のサポートの一つとして、そのプロジェクトの一端をここに書き留めようと思う。

...

まずは村上亘について紹介する。

彼は現在ドイツ・ベルリンを拠点とし、写真を用いて作品制作を行なっているアーティストだ。幼少期を日本・カナダ・アメリカで過ごし、日本語・英語・ドイツ語を流暢に使い分ける。彼曰く、日本語が一番苦手とし、コーヒーとタバコとビールをこよなく愛している。

ドイツ・カールスルーエ造形大学で写真とメディアアートを専攻し、その一方で西洋絵画史の研究を進める。宗教、歴史、政治の役割を二次元的に落とし込む西洋絵画の構図を撮影手法に取り入れ、自身の周辺に起こる事象を写真に納めて作品を作り続けている。2014年以降、「Still Life (静物画)」をテーマに作品制作に取り組んでいる。

次に、プロジェクトについて紹介する。

プロジェクト名は「In Search of Colors」といい、日本語で直訳すると「色を探し求めて」となる。

ここでいう「Colors」は二つの言葉を意味している。一つは「特色」、もう一つは「多

様性」だ。「特色」は言わずもがな、「多様性」という言葉は21世紀を代表するキーワードの一つとなり、しばしばColorsという言葉とともに目にすることがある。

交通インフラが整備され、技術革新により世界中の人と交流することが容易となった現代において、自分とは異なる人種・世代・言語・性・文化などといった「多様性」を受け入れるため、日本の都市「東京」もまた大規模な開発により変貌している。

今回のプロジェクトは2019年から2021年の東京の都市を撮影することにより、東京の都市の特色＝「Colors」を捉え、また開発により現れる都市の多様性＝「Colors」を見つけ出すものである。

それでは、具体的な活動について、全ての活動を記録することはできないが、紹介しよう。ドイツに拠点のある村上は、これまで2019年6月19日～7月22日、11月13日～12月2日に来日し、東京各地のフィールドワークおよび撮影を行なっている。それと並行して、村上や彼の知人を通して東京の都市についてヒアリングし、人物から都市のColorsを探す試みも実施している。インタビューから得られた意見をもとに再度フィールドワーク・撮影を行い、これを繰り返すことにより、多視点から東京の都市を捉えようと試みている。

第一期：2019年6月19日～7月22日

まずは、2020年夏季に開催される東京オリンピックの大開発により、明確に都市の変化が現れているオリンピック関連施設周辺地域を対象にフィールドワーク及び撮影を行なった。また、インタビューは村上や彼の知人を通して4人を選出し、東京に対して抱く印象や東京の歴史、今後の東京の展望について、各自の専門的な側面から答えてもらうようヒアリングした。この4人の回答から共通点を見出し、第一期以降に行うインタビューの質問項目を作成した。以下、簡単な活動記録である。

2019年6月19日～7月1日 | フィールドワーク1

オリンピックを機に新設及び改修中の皇居外苑、新国立競技場、東京体育館、国立代々木競技場、有明アリーナと建築物周辺地域を撮影した。なお、皇居外苑は競歩のコースを予定し、酷暑対策として路面の温度上昇を抑える特殊な舗

装整備工事を進めていたが、2019年12月4日時点で札幌での開催が決定となった。

2019年7月11日 | インタビュー1

村上の大学時代の恩師で、彼が美術を始めたきっかけの一人である美術批評家の方に最初のインタビューを依頼した。「良い批評は違う見方を示唆してくれるものであり、常に作品の個々の質の差を見分けながら批評したい」と語ってくれた。海外出張も多く、普段と異なる地、人々と接する機会の多い彼に、現在の東京、また日本が直面している問題について尋ね、今後、外国人観光客の増加に伴い、東京(日本)は他国と同等レベルの多様性に対する認識が求められると回答を得た。

2019年7月17日 | インタビュー2

村上の知人であり、本プロジェクトのサポートを行うK氏の大学時代の恩師である建築史家の方に、これまでの東京の都市の歴史をヒアリングした。都市開発の歴史は人口増加とともにあり、埋め立てや地下の掘削により使用できる空間を広げてきたことにある。今後ますます東京に人口が集中することによって交通インフラがパンク状態になることが予見されるため、早急に整備する必要があると回答を得た。

2019年7月19日 | インタビュー3

現在、村上が拠点を置いている国がドイツ・ベルリンであり、かつ東京とベルリンが姉妹都市であることから、駐日ドイツ大使館首席公使の方に2都市について尋ねた。東京とベルリンの都市を比較した際に、東京の都市は便利で素晴らしいと語ってくれた。特に、生活利便性の向上のために取り入れた技術(例えば、交通系ICカード)は東京から学べる側面があると回答を得た。

2019年7月19日 | フィールドワーク2

東京臨海副都心地区(台場、青海、有明周辺地区)の撮影を行なった。地区の全体像を捉えるため東京モノレール・ゆりかもめに乗る、6月下旬の撮影よりも広域に足を運んだ。途中「有明テニスの森」駅で下車し、有明アリーナ、有明体操競

技場と建物周辺地域を撮影した。

2019年7月19日 | インタビュー4

村上がドイツでの展示を手伝ったことがきっかけで出会った、世界で広く活動するアートキュレーターの視点から、現在の東京の変化について尋ねた。特に2020年の国際的な催しを機に変化する東京の都市が海外の報道媒体を通して見られることにより、東京に対する俯瞰的な視点が生まれ、東京の都市と海外の都市が比較、相対化されて見られるという回答を得た。

第二期：2019年11月13日～12月2日

自転車を使用し山手線沿線地域を1周しながらフィールドワーク及び撮影した。また、オリンピック施設の完成と同時に競技運営及び大会運営の能力を高めることを目的として実施するテストイベントの視察を行なった。インタビューはラップ活動を行う音楽家、ドイツの会社経営者、日本の会社経営者、建築設計会社に勤める建築家の4人を選出し、4つの質問を行なった。

- ① 2019年時点の東京の特色について、〇〇さんの視点からお聞かせください。
- ② 2020年、そしてその後の2021年の東京は、多様性が2019年以上に求められていると考えています。あなたの専門分野から多様性の有無や弊害、利点を教えてもらえますか？
- ③ あなたの専門(分野)的な活動を通して、2019年の現在、2020年以降に向けてどのような準備をしていますか？
- ④ 東京の公共の交通機関を使用する中で、弊害は感じられますか？

今、読んでいただいているあなたには途中で申し訳ないが、紹介は一旦ここまでとさせていただきます。現在進行中のプロジェクトであるため、今もなお収集した情報の整理、裏付け、写真や動画の記録媒体の編集を継続している最中である。今後の活動として、彼は東京オリンピック本番を迎えた都市を撮影する予定である。なお、第一期、第二期は親近者へのインタビューだったが、知人の紹介や面識のない一般の人々にもインタビューを試みる予定だ。また、東京の次は村上が

住むドイツ・ベルリンの都市を舞台に「In Search of Colors」プロジェクトを行う計画である。その前段階として、まずはドイツにてプロジェクトを紹介、及び作品を展示できるギャラリーを探し、広報する準備を整えている。

最後に、「現在、東京でつくる」ということを観察、記録、紹介することが私の「東京でつくる」ことの一環となっている。彼の「東京でつくる」と、私の「東京でつくる」プロジェクトは、これからも続いていく。まずはこの場を借りて、プロジェクトの一端を紹介できたことを嬉しく思うと同時に、ここまで読んでいただいた縁を機に、今後も動向を見守っていただければ幸いである。

・・・

Outroduction：現在、東京でつくるということ

カシャ。

ワタルくんが使うアナログカメラは、本当にそういう音を立ててシャッターを下ろす。カメラのことをよく知らない私でも年代物だと分かる。親指でレバーを押し上げフィルムを巻く。そしてもう一枚、カシャ。

彼は丁寧に写真を撮る。機材を取り出し、三脚を立て、カメラを設置し、構図を決めて、水平と垂直を調整する。時間をかけて何度もレンズを覗き込み、数ミリ単位の微調整を重ね、最も美しい構図で撮る。私は遠くからワタルくんを動画で記録する。彼をタイムラプス動画で撮影すると、周りの風景は猛スピードで動くのに、ワタルくんはお地藏様みたいに動かなかったのが面白かった。彼が持っている時間の速さは、きっと私たちと違うのだと思った。

「タバコ吸ってきていい？」

いいよ、と言いながらもどこに喫煙所があるのか。毎回、よく見つけられたね、という場所を見つけてくるから感心する。服や髪の毛に臭いが付着するのが嫌なので喫煙所にはついて行かないが、丁度いい休憩スペースもないので、道の端っこに突っ立って待ちぼうけする。同じ服を着た勤労戦士たちが目の前を通り過ぎる。夕方の新橋を行き交う人々の目は私を映さない。カジュアルな格好は街から浮いて見えたが、この時間に気にするような人は誰もいないので安堵する。まだワタルくんが来る気配はなかったので、街路樹の植え込みに撮影機材を置いて座る。数分間だけ人間観察。皆、早歩きで余裕がない。まるで軍隊みたいだ、そう思った。

「おまたせしました。」

ワタルくんが戻ってきた。

「喫煙所、あった?」「うん、ビルの奥の方にあった。すごく狭いスペースだったし、分かりにくかったけど。」ワタルくんは無事、休めただろうか。

「じゃあ、帰ろうか。」よっこいしょ、の掛け声とともに荷物を背負う。軍隊の一員になった気持ちで帰りの列に参列する。

ふと見上げると、高層ビルが空を埋め尽くしていた。あの窓の光ひとつひとつに人がいて、働き、住んでいる。

10年後も、20年後も、あの窓の向こうにいる人は、そこにいるだろうか。あのビルは、そこにあるだろうか。

現在、東京でつくるものがこの先の未来を形作っている。まだまだ東京は変わることをやめない。

Profile

朝山 紗季(あさやま・さき)

東京歴6年目。いまだに渋谷・新宿など都心に慣れない。今後も23区外で住み続ける予定。

佐藤 しずく

他のメンバーたちが言葉を見つけれないでいる時、いつも口火を切ってくれた、それも励まされるような言葉を投げかけてくれたのがしずくさん。そのまなざしが、東京に対しても惜しみなく注がれているエッセイ。

その人は、

その人は、ひんやりとしていた。

どれだけ近くにいても、どれだけ言葉を交わしていても、別の場所にいる気がした。

背が高くていつもモノクロの服をまとっていた。

頭が良くて、聞いたこともないことをたくさん知っていた。

友達も多かった。明るくて話し上手で、どんな人でも虜にしてしまう、そんな人。

例えば秋の肌寒い日に公園を散歩した時、

「寒くなってきたね」

「そうだね」

「今年は雪が降るかな」

「どうだろう。暖冬って言ってたからなあ」

「降るといいな」

「どうして？」

「雪好きだから。寒いのが好きなんだ」

「ええ、あっつい方がいいよ。なんか明るいじゃん」

「暗くてじめっとした方が好きなんだよな」

「意外。かんかん照りの気候とか好きなのかと思ってた」

「なんなら、冬に向かっていくちょうど今の時期が一番好きだな」

「ふうん」

その人との会話が好きだった。

いろんなものの中を通り抜けてしまう風のように、ジメジメしてなくて、さらっとして。春のあたたかい風というよりは、秋の風みたいにスーッと冬の気配を感じさせる。

だけど、会話と会話との間、その人は私の目を見ているようで見ていなかった。しっかりと目を見ている。でもその奥の何か、私でない別のものを、私を通して見ていた。

それは、とても寂しかった。

その人は普通の人の十倍もの寂しさを背負っている気がした。本人は全くわかっていない。知らぬ間に罪を着せられ、それにまだ気がついていないという具合に。本人だけでなく、その重さに他の誰も気がついていないのだけれど、ほろっとこぼれてしまう一片の寂しさだけは隠しきれないのだった。

「寂しいの対義語って、なんだっけ？」ある人の言葉を思い出す。

「寂しくない感情をわざわざ言語化する必要がないから、残ってないんだろうね」

私たちは、寂しさを初めから抱えているものなのかもしれない。しかもそれにほとんどの人は気がついていない。でも、寂しさを抱えたその人になぜか愛着が湧いてしまうのは、なぜか寄り添いたくなってしまうのは、自分の奥底にあるものが呼応しているからなのだろうか。その人の寂しさは、周りの人を巻き込んでしまう。それでも、その人はポツンと立っている東京タワーのように、どこか遠くを見ていた。ずっと。

...

その人は、あたたかい人だった。

静かで冷たそうな印象とは異なり、話せば話すほど人間らしさが伝わってきて、身体中にじんわりとしみわたる出汁みたいな人だった。

背が高く端正な顔立ちをし、いつもスーツや小綺麗な装いをしていた。余計なものは身につけず、自分のこだわったものだけを選んでるように見えるので飲み会などには誘いづらい。付き合う人も、きっと選んでいるのだらうと思わせる。

だけど、

「ハンカチ、可愛いですね」

「…ん？」

「ポケットからちょっと出たので」

「…あ、ありがとうございます」

「へ～意外」

「何がですか？」

「お弁当自分で作ったりするんですね」

「うん、まあ～たまにですけど」

「しかも綺麗ですね、ちゃんと考えて作ってるって感じ」

「いや、あるもので作っただけだけどね」

「今日は何がいい？」

「ん～、パスタとか？」

「パスタか…ベーコンとかあるから、カルボナーラにする？」

「あ、食べたいカルボナーラ！カルボナーラとか久しぶりだなあ…でもまずはキッチン片付けないと」

「うわそうだった忘れてた、片付けしないで家出たんだ」

「ほばいつもそうじゃない？そういうとこ、意外とあるよね」

「そうかねえ、」

その人の家の中は、意外にも整頓されているわけではなく、片方だけの靴下が落ちていたり、朝に使った食器がそのまま台所に積み上げられていたりしていた。フローリングに散らばる洗濯物を気にせず跨ぎ、ソファに座りに行く様子を見て、可笑しくなる。

全然完璧じゃない。でも一緒にいると、まるで自分が日向ぼっこをしている猫のような気持ちになれた。家の中の景色が似合う人だった。

...

その人は、カラッとした人だった。

無愛想で、話しかけても返ってくる言葉数が少なく、怖かった。

最初のうちは、

「何が食べたいですか」

「…なんでも良いです」

「このエビチリ美味しいですね」

「そうですね」

「今度はどこ行きたい？」

「どこでもいいや。好きなところにしなよ」

という風に、聞いたことに対して答えるだけで、話は弾んだ記憶がない。

その印象が変わることはなかったけれど、慣れてくると不思議とその素っ気なさに安心感すら感じてしまうようになった。

その人は、不器用な人だ。じっくり距離を縮めていくと、そうわかる。

二人の会話が止まった時に流れる、穏やかな時間が好きだった。小さい頃、叔

父が海外出張のお土産に買ってきてくれた大きい貝殻に耳を近づけると、砂浜に打ち寄せる波のさざめきがかすかに聴こえた。本当に南国のあたたかい風を感じているかのようで、その不思議さに、貝殻を耳から離しては寄せて、を繰り返していたのを思い出す。その人と話しているとそんな記憶を思い出すような、ゆったりとしていて絶対に安全な空気が流れる。

でもやっぱり素っ気ないんだけど。言葉と気持ちが一致していないことがわかるから、私はその素っ気なさの中に、安心感や優しささえ覚えてしまうのだ。

...

東京は、ずっと嫌な街だった。空を見上げれば首が痛くなるほど高いビルがあり、足元を見ればゴミが落ちている（もしくは嘔吐物の痕跡）。そして周りを見渡せば人、人、人。家が神奈川県の外れということもあり、出かけるだけで疲れてしまった。なるべく行きたくない街だった。それでも大学生になってから東京に行く機会が増えた。気がつかない間に「東京に、」の後に続く動詞は「出かける」から「行く」になっていった。そして「東京に行く」から「渋谷に行く」「新宿に行く」に変わっていた。それまで東京のことを故郷だとは一度も思ったことがなかったけれど、海外旅行から帰国したら少しだけそう思えるようになっていた。年を重ねることに東京との接点は増えてゆき、関わり方やイメージもどんどん変わってきている。

そんな変化の中でも特に意外だったのは、東京に対して愛着心が湧いてきたということ。

1年前くらいから、所属する研究室での調査のため、渋谷や恵比寿に頻繁に通い始めた。すると、沢山の人やビル、光、音に囲まれているのにどこか寂しそうだとか、意外なところで見られる生活感とか、干渉してこないような冷たさに安心感を覚えたりとか、今までとは全く異なる東京を感じるようになった。コロコロ表情を変える東京が、実は人間なのではないかと錯覚するくらいに愛おしく思えてきてしまったのだ。

そして今回、「東京でつくる」というテーマのもとで文章を執筆するにあたり、東京に対する思いや見方を擬人化することで、私が抱えている不思議な愛着を表

現してみることにした。…とはいえ、感情を人に正確に落とし込むことは意外と難しく、最初は思うように手が動かなかった。具体的に書くのか、抽象的に書くのか。現在形にするのか、過去形に統一するのか。細かいことばかりが気になって仕方ない。でも、本当に自分が表現したいものは何かを考えたら、恐れずに書いてみようという気持ちが沸き起こってきた。それと同時に、知らぬ間に正解に近づこうとする思考回路から離れられなくなっていることを実感した。だから今回のこの文章は、実験のつもりで執筆した。これまでの自分の表現に拘らず、自由に、自由に。そうやって、新しい自分を発見したかったのかもしれない。

東京との関係性の話に戻る。これからもずっと、私と東京との関わり方は変化していくだろう。東京で働くかもしれない。結婚して子どもを東京で育てることになるかもしれない。もっと関わりが増えるかもしれないし、そうでないかもしれない。東京に対して思うことは節目節目で大きく変わっていくと思う。東京はいつも動いているからだ。まるで息をしているみたいに。何かを求めているみたいに。動きが止まることはあるのだろうか。今までに一回でも同じ景色を見ることが、この街であり得たのだろうか。街も息をしているということを、東京は教えてくれた。

...

「ありがとう。これからもよろしくね」

Profile

佐藤 しずく(さとう・しずく)

大学3年生。コミュニケーションを学んでいる。

幼い頃から表現することが好きだったが、いつしかコンプレックスになっていた。新しい自分を見つけようと、このワークショップに参加を決める。最近気になることは、電車の中の人々の会話。

タカノレイ

賢さと思慮深さと、哀愁と愛嬌と、ユーモアと洗練と。あまりに秀逸で舌を巻きました。書く孤独を愛することのできる人だと勝手に思っているから、これからも密かにファンしています。泥臭いやつも読んでみたいです。

#東京処分日記

これは一人の東京都民が、自室から何か「ひとつ」を捨て続けた30日間の記録である。

1日目「1DAY 使い捨てコンタクトレンズの空き殻」を処分した。毎日顔を洗って、コンタクトレンズをつけて、殻を捨てるのがめんどくさくてそのまま洗面台に溜めていた。がさっと掻き集めると、プラスチックがこすれてカラカラ鳴った。まだ濡れていた殻を、まとめてゴミ袋に捨てた。

2日目「ウイスキーの空き瓶」を処分した。ほんの少し残っていた琥珀色の液体を台所に流すと、甘いアルコールの臭気が漂った。コンビニで買ったどこにでも手に入る安いウイスキーは、一人で酔いたい時に役に立った。ウイスキーは過去が似合う酒だと思った。

3日目「カバンの中に溜まった資料」を処分した。ミーティングで使った資料、いつか使うかもしれないとカバンの中に眠らせて、いつの間にか忘れていて、気づけば意味を失くしていた。まとめてみると案外重く、ものとしての紙の存在を感じた。

4日目「携帯用の歯みがきセット」を処分した。歯ブラシと歯磨き粉が入った縦長のプラスチックケースには、水斑がこびりついていた。旅行や出張に行くときにあって便利で、毎回買うのも億劫だから残していた。しばらく遠出の予定も無かったので、そのまま捨てた。

5日目「使わなくなった香水」を処分した。初めて香水をつけた時は、慣れない香

りがなんだか自分じゃないみたいと感じた。使ううちに馴染んできても、気分が変わるとまた違う香水を買った。広告みたいだなと思った。

...

「東京でつくる」ということは、考えれば考えるほど抽象的だ。どこまで近づいても掴みどころがない。“漂流の美学”や、“住みたい街”、“生活の風景”をキーワードに、なんとかたぐり寄せようとしてみても、いつもすんでのところでヒラリと身をかわされてきた。「東京の女性」のイメージもだいたいこんな感じで、なんとももどかしいばかりである（これは過分なる筆者の偏見だけれど）。

まあでも、おそらく考えているだけでは手に入らない類のものなのだろう。「東京でつくる」ということの意味を掴み取るためには、何かしら具体的な解法に取り組まないといけなのかもしれない。

...

6日目「2018年の手帳」を処分した。初めて手帳を使った年が、そのまま手帳を使った最後の年になった。甲斐性が無いのか、使い続けることができなかった。ほんの数日分だけ予定がびっしりと書き込まれ、息を止めるように言葉が詰まっていた。余裕が無かったのだと思った。

7日目「冷蔵庫の中身」を処分した。中途半端に飲みかけた牛乳、賞味期限の切れた卵、干からびたニンニクなどをまとめて捨てた。一ヶ月前には食べられたものが、今では食べられなくなってしまった。ゴミ袋に入れると、心臓のあたりがチクリと痛んだ。

8日目「食器洗い用のスポンジ」を処分した。不規則な生活になると、料理はもちろん、家で食事をすることが少なくなった。食器を使うことも無いので、出番の無いスポンジは黒ずんでいた。指でつまむようにして、ゴミ袋に捨てた。

9日目「動かなくなった腕時計」を処分した。もともと腕時計をする習慣が無かったのに、なんとなく買った安い腕時計は、結局一度も使わず動かなくなってしまった。止まった秒針はやけに凜として、どこか遠くを指し示しているように見えた。

10日目「イベントでもらった限定グッズ」を処分した。特に欲しくもなかったけれど、なんとなくもらった。メルカリで売れるかと思い検索すると、同じグッズは3,000円の値段で、誰にも購入されずに売れ残っていた。出品せずにそのまま捨てた。

...

そんなあきらめにも似た焦燥感もあってか、いつの間にか「自室で捨てる」という、具体的行動を伴うプロジェクトを始めた。自室という極小の東京で、捨てるものについて日記を書く。とてもシンプルなプロジェクトだ。ちょっと後付けの試行理由を加えるならば、「捨てる」という行為と「つくる」という行為は、対極であると同時につながっているのではないかと感じていた。

例えば、彼女を“つくる”と言えば、それは自分とある女性との間に、関係性の“始まり”を与えることを意味する。逆に、彼女を“捨てる”と言うと、それは関係性に“終わり”を与えることだ。「つくる」ことが始点を打つ行為ならば、「捨てる」ことは終点を打つ行為である。そしてその2点は、一方向に流れる直線的な現象というよりは、「つくる」から「捨てる」ことができる、「捨てる」から「つくる」ことができるといった、円環あるいは螺旋的に循環する、表裏一体の現象である。そんな風にイメージを膨らませた。

...

11日目「使わなくなった携帯のアプリ」を処分した。指先ひとつで、テトリスのようにさくさくと消した。すっきりはしたけれど、アプリの配置がいつもと変わって、しばらく慣れなかった。身体がまだ追いついていないと思った。

12日目「前の財布に挟まっていたレシート」を処分した。2017年6月3日(土)13時24分に、水出しアイスコーヒーとカフェラテ(豆乳)を購入していた。2年以上前のレシートは、文字が薄くかすれて、ほとんど読めなくなっていた。誰とカフェに行ったのかも、思い出せなかった。

13日目「使わなくなった靴下」を処分した。いつ買ったのかもわからないくらいに、ずっと押入れに眠っていた。白い生地はうっすらと汚れ、とところどころ毛羽立って

いた。同じ種類の靴下が三足あり、それぞれ違う汚れ方をしていた。個性が宿ったようで、なんとなく捨てづらかった。

14日目「壊れた iPod nano」を処分した。液晶画面にはインクをこぼしたような、まだらの染みが広がっていた。黒のアルミボディの塗装は剥がれ、手に取るとひんやりと金属の質感が伝わってきた。化石みたいな感じがした。

15日目「上京して初めて住んだ家の住民票」を処分した。自分の名前の下欄に、当時住んでいた家の住所が記入されていた。何度も書いた住所の文字のならばには、いまでも名前と同じような親近感を感じた。住所が身体に刻まれていると思った。

...

もっと考えてみると、「自室で捨てる」という行為は、「東京でつくる」ことのひとつの具体的表現にも見えないだろうか。“自室”は極小の“東京”で、“捨てる”は“つくる”と表裏一体の行為である。そうであるならば、「自室で捨てる」行為を記録し続けることによって、「東京でつくる」ということに、手触りを感じる意味を見出すことができるのではないだろうか、と仮説を立てた。つまり、「自室で捨てる」具体的試行を通じて、「東京でつくる」という抽象的思考に挑んでみたい。というのが、今回「# 東京処分日記」を書いた理由だ。

よってこれは、単なる日記ではなく、「東京でつくる」というテーマに応答した一つの個別解として、読むに値するレポートなのだ.....というのが、文字通りあとづけのあとがきである。

...

16日目「体重計」を処分した。大学の卒業記念パーティーのビンゴの景品で、体脂肪率も測ることができるブルーの体重計をもらった。それ以来ずっと、部屋の隅で浮ついた色を光らせていた。体重計を捨てると、部屋の中が妙にすっきりした。17日目「コートのポケットに残っていたゴミ」を処分した。くちゃくちゃにまとめてあった紙を開くと、春先に外食したときの2枚のレシートだった。ひとつには購

入物に“桜と春野菜S”、もうひとつには店名に“スエヒロガリ”と印字されていた。おみくじを引いたような、楽しい気分になった。

18日目「浴室の排水溝に溜まった髪の毛」を処分した。ほんの少し前までは自分の一部だったものが、今では扱いづらいものとして感じるようになった。直接手で触れないように、ティッシュで包んで丸めて捨てた。

19日目「赤いブリキのチョコレートケース」を処分した。手のひらに乗るくらい大きさの、宝箱のような形で、フタにNEW YORKと書かれていた。誰か大切な人からもらった気がするけれど、思い出せなかった。思い出を一緒に捨てるような気がして、しばらくずっと眺めていた。

20日目「目黒区納付書兼納入済通知書」を処分した。転職したとき、人事書類の手違いで、しばらく住民税が給与から天引きされていなかった。そのうち真っ赤な封筒が家に届き、差し押さえを予告する紙が入っていた。住むことを否定されているような気分になった。

...

理由はどうあれ、30日間「捨てるもの」に向き合ってきた。それぞれのものは、それぞれの経緯で自室にたどり着いてきた。しかし共通しているのは、それらは全て、明日には「無いもの」だということだ。捨てるために選んでいるのだから、当然と言えば当然である。ただ、明日には「無いもの」について書こうとすると、いつも、どうにも胸をかきむしられるような気持ちになった。

普段は何事も無かったかのように捨てられるものたちに、ひととき目を向けてみる。じっくりと眺めながら、ふと湧き上がる言葉を、日記として残していく。ときおり、忘れていた記憶を思い出すこともあれば、もう思い出せない記憶に、想いを馳せることもあった。そんなことを続けていると、どういうわけか妙に落ち着いた気分になっていく。「捨てるもの」について日記を書くことは、別れの儀式と言ってもいいのかもしれない。ああそうか、これは一種の「葬式」なのではないかと、30日間の「#東京処分日記」を書き終えて考えるようになった。

...

21日目「フライパン」を処分した。どこかのスーパーで買った少し大きめのフライパンは、一人分の料理をするといつもつくり過ぎていた。今度は小さめのフライパンを買って、料理をつくってみようと思った。

22日目「古着屋のポイントカード」を処分した。渋谷でふらっと見つけた古着屋が、わりと好みの雰囲気、グレーのTシャツと黄色いパーカーを買った。普段は断るポイントカードを、また来るかもしれないその時はもらった。結局捨てることになった。

23日目「はやかけん」を処分した。博多駅で交通ICカードを買うと、スイカではなく“はやかけん”が出てきた。風が気持ちいい街だった。すれ違う美人も多かった。街の名残をカードに感じた。

24日目「イヤホン付属のシリコンキャップ」を処分した。耳の穴の大きさに対応できるよう、いくつか形と色の違うキャップが、購入した時についてきた。とりあえず保管しておいたけれど、一度も使うことは無かった。すぐに捨ててもよかったなと思った。

25日目「充電できなくなったiPhone」を処分した。SIMフリーのスマートフォンにはデータが移行できなくて、古いiPhoneをそのまま残していた。久しぶりに中身が見たくて充電しようとする、反応しなくなっていた。どんな思い出があったのか、もう見れないと思った。

...

「葬式は、死者に対する務めというよりは、生者に対する慰めである」と、古代ローマの哲学者アウグスティヌスが言ったらしい。日本における四十九日法要も、生者が「死」を受け入れる折り合いをつけるために必要な期間、といった側面もあるようだ。なるほど、東京における生きづらさの正体はお前だったのか、と長年追いつけてきた怪盗を見つけたような気持ちになった。東京は、よく変わる街だ。通勤路の道玄坂に、いつの間にかタピオカミルクティーを売る店ができて、前に何があったかなんて覚えていない、ということはおごく日常の出来事だ。少なくとも東京

では。しかし日常の風景が変わってしまうことは、そこに暮らす人々に、少しずつ傷を負わせる。何かが変わってしまうということは、ちいさな「死」だ。多かれ少なかれ、驚きと、諦めを、否応なく人々に強要させる。気づかないうちに。心をなだめる時間も与えないままに。そして、そうした細かい傷が積み重なり、どうしようもない生きづらさになったとき、東京に居場所が無いと感じるのではないか。東京は、よく変わる街だ。だからこそ、東京にはもっと「死」を弔うための「葬式」が必要なのではないだろうか。

...

26日目「Nikonのデジタルカメラ」を処分した。学生時代に使っていたカメラをずっと押入れの奥にしまっていた。カメラ自体にたいした愛着は無かったけれど、SDカードには学生の頃に撮りためた写真が保存されていた。今でも見たいと思える景色が、たくさん残っていた。

27日目「ドリップコーヒーセット」を処分した。二人分も余裕の600mlセットだったけれど、前の家から引っ越すときに、段ボールの中で割れてしまった。捨てるのも惜しくて、ずっとそのままにしていた。壊れにくいものが欲しいと思った。

28日目「週刊少年ジャンプ」を処分した。体調が悪いときには、なぜかコンビニで甘いものとジャンプを買うことが習慣になった。学生の頃には、立ち読みばかりして絶対には買わなかったジャンプを持ち帰り、読んだその日のうちにすぐ捨てた。贅沢な反抗だと思った。

29日目「プレゼント用のドライフラワー」を処分した。はがきサイズのプラスチックケースに、色づけられた花が入っていた。「住所を書いたら、そのまま郵便で送れるんですよ」と、店員さんが言ったのを思い出した。ずっと前に手に入れたはずのドライフラワーは、嘘みたいに綺麗なままだった。

30日目「1DAY 使い捨てコンタクトレンズの空き殻」を処分した。いちいち捨てるのがめんどくさくて、洗面台に空き殻を溜めておいた。さっさと捨てたらいいのにとと思うけれど、なかなか捨てられなかった。洗面台に溜まった殻を眺めると、なんとなく安心するのが不思議だった。

...

日記を書いているときは、なんともおだやかな時間が流れていた。ひとつひとつのものに、自分の中に生き続けていく言葉を芽吹かせていく。情報を伝えるためではなく、感情を叫ぶわけでもなく、「死」を弔うように、しんしんとなだむ言葉たち。「捨てるもの」に向き合う時間は、自分自身に向き合う時間でもあったのかもしれない。漂流するように、それぞれの経緯で自室にたどり着いてきたものたちは、いつの間にか自分自身の一部にもなっていた。そう、日常の風景は、自分の記憶の一部なのだ。「捨てるもの」を弔う時間は、「自分」を弔う時間でもあったのだろう。そういえば、東京タワーの一部には、戦車を解体した鉄が使われている、という話を聞いたことがある。かつて人を殺めるために使われていたものが、今では人に何かを伝えるためのものとして、生まれ変わっていくことができる。そんな話を思い出したとき、東京を象徴する電波塔が、「死」を弔い「生」を慰む、お墓のようにも見えてきた。

東京は、よく変わる街だ。そしてこれからも、東京は変わり続けるだろう。そんな東京で、ずっと「つくる」ということに、意味を見出せないでいた。東京で何をつくるべきなのか。なぜつくる必要があるのか。正直、それはいまでもわからない。ただ、「つくる」ものだけでなく、「捨てる」ものに目を向けること。無くなっていく風景を弔うこと。そんな行為が、新しい東京を迎え入れ、ここに暮らす人々が確かな居場所を感じるために、必要な儀式なのかもしれない。

東京の風景は、東京で暮らす人々の、生活の記憶でもあるのだから。

Profile

タカノ レイ (たかの・れい)

福井生まれ。東京在住。

今井 亜子

どこか夢見るような瞳で、遠慮がちに、だけど自分の身体で嘘のない手触りを食欲に探り当てようとするような。賢い少女のような、獐猛な獣のような言葉たち。この先に「戯曲」が生まれることを楽しみにしています。

「まだ見ていないことと、知り尽くしたもの」

私にとっての東京はなにか。毎日毎日東京には来ているけれど、考えたこともなかったかもしれない。これといった「東京」のイメージはなく、すぐに、住んでいる地元のことが頭に浮かんだ。神奈川県秦野市。東京までは、小田急線に乗って約1時間。私の通っている北千住の大学までは2時間弱かかる。私にとって東京は、決して近くはないけれど遠すぎるほどでもなく、という場所で、そういう風に地元からの距離でしか認識してこなかった気がした。ならば、「移動」や「距離」をテーマに東京を考えてみよう、と思った。そして、そもそも普段私がしている「移動」って…電車という決められた乗り物に乗って、線路という決められた最短距離の上を移動していることを指しているのではないか。社会のルールによって規定されている移動の仕方にしたがっている。極端に言えばそういうことになるかもしれない。そうではなくて、もっと自分の体に素直に、東京を感じてみたい。ひとつの場所について考えた時にこれといった思い入れがないというのはなんとなく寂しい気がした。毎日通ってきているのに。

毎日の忙しなさに埋もれているような感覚がずっとある。消えずに、ずっと。ただ休みが欲しいというのと、違うのだろうと思っている。もう少し、自分のペースで生きたい。誰かと比べてというわけではないけれど、私はたぶん、のんびりな速度の方が合っているから。

いつも電車に乗ってすっ飛ばしている通学路を、自分の足で歩いてみよう。自

分の身体を伴って東京を感じてみよう、そう思った。もう少し、一步一步踏みしめて、私のペースで。

等間隔で歩いている。

近づきもしない、離れもしない。

もう三日三晩歩いている。

最初のうちは言葉を交わしていたかもしれない。

あまり覚えていない。

この固定された距離を壊すことも考えた。

でも、歩くということはリズムであり、そのリズムを壊すのは想像以上に難しいことだ。

街は砂に埋まっている。

長い長い距離と時間を歩いたが、その間にも少しずつ砂は増えていった。

街は沈んでいった。

砂がいったいどこから流れてきているのか、わからなかった。

街はただ満ちていくのを待っていた。

二人だった。

一人で生まれたのかもしれない。

でも覚えている限りでは二人だった。

自分の中にもう一人を内包していた。

もう一人の中にも私を内包していることはわかった。

私たちは相変わらず歩きながら、沈黙を続けていた。

私の体ともう一人の体はいつか、満ちるのを忘れていた。

それでも、死ぬことを許されるまで私のリズムはもう一人のリズムだったし、もう一人のリズムは私のリズムだった。

まだ、死ぬことを許されていないのだった。

歩くのはいつも夜になった。いちばん時間がつくりやすかったから。今日は歩こう、

と決めるとワクワクした。これから私は何者でもなく、ただ歩くんだ。そんな気持ち。

知らない街を歩くと、果てを意識するようになる。ビルとビルの間に道が消えていく。私これから進む道に、私はこれから消えていく。けれどもズンズン歩いていくと、見えていた果てのさらに向こうに地続きになっている街があることを知る。当たり前かもしれないけれど。いや、たぶん当たり前なのだけだ。自分の目が見ている範囲がどれくらいか、そしてその先はどうなっているのかということを全然知らなくても平気で日々過ごしていたことに気づく。特に地元など、もうある程度知っている街では、視界のさらに向こうに何があるということを知っているのに、見えていない景色に不安になることもない。

私は、“まだ知らない”という状態が好きだ、と思った。それは、知ってしまえば何でもないものに切り替わる状態でもあると思う。聞こえてくる男女の話し声が日本語（あるいは別の言語）として聞こえるようになるまでの時間。私の耳は認識しようと急ぐ。でもそのわからなさが心地良いとも感じている。それから、少し先にぼんやりと見える看板の文字がまだはっきりと見えず何かのお店なのかもわからずにいる時間。近づいて見てからのお楽しみ、とすれば、わからないことに焦ることもない。むしろ知るまでのあれこれ想像する時間が楽しい。そして私が今居て、歩いている街は、そんなわからない時間や状態で溢れている。ぼんやりと、わかってしまうまでのほかない時間にひっそりと身を置いていた。心地よかった。

私の日常の中に

あなたはどうしても浮かんでいて

夢の中で出会う方がずっと

現実的で

そして私は歩きながら、自分の体の声を聞こうと試みた。歩くことは、眠りにつくことと似ている。体の重みに次の一步を預けること、体の重みに眠気を預けること。歩き、私の日常の中に浮いてしまっている夢のような出来事たちに杭を打つ。

夢うつつ、屋下がり。

下腹部は不思議な重みを帯びている。

お風呂の栓を抜くと水がすべて流れこんでいくような、水の引力、子宮に向かって流れこんでいく。

眠りの世界が見えているけれどまだ頭は起きている、そんな状態のとき、私は体のすべてに意識を持っていく。やはり子宮が一番重い。

何年か前に見に行った、泉が連想される。水は透き通っていて青く、どこまでも層が続いていくように見える。どこまでも、どこまでも。そして、どこからかこんこんと水は湧いている。

今年の夏の終わりは、台風が印象的だった。雨降りが何日間も続いた。天気というものは、絶対的に私たちに影響を与える。物理的にも精神的にも。どれだけ悪いニュースが流れても、ただこなす毎日が明日も続くように思われても、否が応でも逆らえないものがある。それは晴れであっても状態としては同じことだろう。

2019年10月12日、過去最大と言われる台風が近づいてきていた。その日がちょうど生理にあたった。女に生まれたけれど、自分の体のこと、周期のようなものはあまりつかめていない。月に一度やってくるお腹の痛みにも未だ慣れるということはない。その日は低気圧ということも手伝ってか、下腹部の重みはいつもよりもひどいものに感じられた。台風で外に出られなかったで私は寝ていることにした。横になっていると、自分の体の重みをよく感じられる。感じることに集中できる、ということだろうか。子宮の重みを感じていた。抗うでもなく、ただ眠ってしまえるまで待っているという感じで。うとうとしている最中、何年か前に見に行った泉のことが思い出された。祖父母と一緒に行ったのだった。水が湧き出る源を見ることができると公園のような場所だった。その湧き出ている場所は、青というよりもエメラルドグリーンの色をしていて、層がいくつも重なっているように見え、覗き込むだけではいったいどれくらいの深さがあるのかよくわからないのだった。眠りにつこうとしたあの時なぜそのことを思い出したのか、よくわからない。けれども見えない体の内の現象と、どこまでも続いていく底の見えない泉は、なんとなくイメージの中で重なっていった。

砂に足を沈ませながら私たちは歩いた。

気持ちの浮き沈みは足取りにともなわない。

見えている地平線のように

穏やかでまっすぐな気持ちで

歩いている。

東京には、私がまだ見ていないものがたくさんある。私が私の中に、“まだわからない”状態であることを許す場所がたくさんある。街中にあふれすぎている情報達をただ、そこにあるものとして。私もただ、そこにいるものとして。街はそれらを抱える。

「知ってしまったあとは…?」

歩きながらふと、不安になった。知る、わかるまでの時間に浸っていたけれど、知り終わった街に私はどう向き合えばいいのだろう。それは先の見えない地平線の向こうへ行くよりもずっと、怖いことに思えた。記憶という過去が恐ろしく重く、私にのしかかっているような。もしもこの先があるとしたら、知り続けることで私は何かを失ってしまわないだろうか。

満ちていく砂に埋まっていく街は、形を変えない。

ただずっと美しいまま、砂を満ちさせていた。

少し先に、まだ埋まっていない建物がポツリと見える。

空は赤みを帯びて、黒い大きな影をつくる準備をしている。

星はまだ少し、抵抗している。小さな輝きを私たちに届けるために。黒い影に完全におおわれてしまわないように。

あそこで少し休もう、私は言った。

私たちは少し休むことにする。

「歩き続ければきっと、」もう一人が言った。

まだこれから、移動を続けていく。

Profile

今井 亜子 (いまい・あこ)

東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科に在籍中。演劇、身体表現を学ぶ。好きな食べ物はナス。夢はバオバブの木を見にマダガスカルへ行くこと。

高須賀 真之

透徹。流れるもののように、鉱石のように。都市と詩句が響き合う、その隙間からこぼれ落ちる一筋の熱が沁み渡ります。東京で寂しくなるのは、心も血も通っているからこそ、ですよね。いつか本を出してください。

「 を記述する」

〈玄関を開けて闇が入り込むまでを待っている 手放すのが怖い〉

「玄関を開けて、夜の深まった闇がこの部屋に入り込むまでを、わたしは待っている。明かりの下にさらされたものはわたしにとってどれも曖昧で掴みどころがなかった。闇だけがはっきりとした輪郭を持っていた。手放すことは怖かったけれど、一度手放してしまえば水面にカラダが浮かぶように余計な力が抜けていった。手放さずに耐えつづけるにはわたしは疲れすぎていた。手放して闇に身を委ねることで、わたしはようやくわたし自身の輪郭を取り戻すことができた。……」

※

まちを歩く。

昼の太陽。冬のあたたかな陽射しに誘われるように外に出る。この日は簡単にごはんを済ませて、図書館に少し寄って、買い物をしたら帰って、溜まっていたタスクをこなす予定でいたのに、気がつくと計画していたルートとは真逆の方向に足が動いている。すでに決められたことから逃れようとするように、こうしなきゃならないという思い込みの重力に逆らおうとするように、足が動いていく。コンクリートのまち。そのなかにも土が剥き出しになっている地面はあって、足はひとりでに土のやわらかな皮膚に触れようとする。

土を踏む感触に飢え踏みしめるたびに土へとほころびる足

まちを歩く。

吉祥寺までの道のり。なるべく日向を選んで歩く。カラダが陽射しを浴びられるように。カラダの影が生まれるように。途中、ある細い通り沿いで、普通の一軒家のガレージで野菜や果物を安く路上販売している。一度通り過ぎたけれど思い直して引き返し、りんごを一個買う。80円。赤いらんごの入ったビニール袋をぶらぶらさせながら、さらに歩く。

吉祥寺に来ると、まちに来たな、といつも思う。行き交うひとびと。駅前のアーケード街。行きつけの定食屋で美味しいごはんを食べて、ヨドバシカメラの裏にある図書館に少し寄って、井の頭公園へ向かう。陽の当たるベンチでしばらくぼんやりとする。隣のベンチで車椅子に乗ったヨーロッパ系のおじさんがお喋りをしている。このおじさんはいつも公園のベンチに居て、いつもだれかと少し訛りのある日本語でお喋りをしている。彼が他のことばで喋っているのをまだみたことがない。

失業していた頃、毎日のように井の頭公園へ来た。夏。強すぎる陽射しを避けて、なるべく影のなかを歩くようにして。まちの路面はコンクリートでくり抜かれた影で凸凹で、そのどれもが嘘ものようだった。嘘でつくった闇。そのなかを通り過ぎていくカラダも、どこか嘘のようだった。公園にたどり着くと、売店でラムネを買って、木陰のベンチを選んで、ベンチに座ってゆっくりラムネを飲んで、飲み干したラムネから青いビー玉を取り出して、森を覗く。さかさまの森。ビー玉の先にあるさかさまになった世界の方が、ほんとうなのかもしれない。

ビー玉を透かして見ゆるさかさまの森にあなたと過ごせし日々を

まちを歩く。

いつかの緑道。道を覆い隠していた落ち葉がきれいに掃き取られ、いくつもの半透明のビニール袋に詰め込まれている。袋は二段に積まれ、パリケードのように横に長く並んでいる。まるでなにかを塞いで隠してしまおうとするかのように。ゴミ袋。〈ゴミ〉と名づけられた瞬間、自然の営みの一部は切り取られ、剥ぎ取られ、廃棄されるべき存在になる。袋に詰め込まれた落ち葉たちはやがて土に還ること

もなく燃やされて煙になるだろう。煙は死を揉み消すだけ。煙はひとに偽りの涙を流させるだけ。いつまでも奪われつづけてしまう。ばんばんに膨らんだゴミ袋の一部の腹が裂け、そこから内蔵のように外に吐き出された落ち葉たちが、昨晚降った冬の雨に濡れてひかっている。

いつまでも奪われつづけてしまうから時雨に濡れる落ち葉を拾う

まちを歩く。

いつかの路地。頭のなかがかんがらなくなって、東京の夜の繁華街を亡霊のように彷徨っていたら、ふと、かつてとあるツアーパフォーマンス中に歩いた道にいま立っていることに気づく。そのまま、かつて大勢のひとたちといっしょに歩いた道を、ひとりで、かつて歩いた道順を逆走するようにして歩いた。何本もの線路を見下ろし、巨大な塔に見下ろされている橋を渡り、ラブホテルに挟まれた路地を通り、狭い住宅街を抜けて商店街を横切り、小学校へ。きっと迷うだろうな、と思いつつ歩いていたのに、迷わず、間違えることなく、かつて歩いた道をたどった。迷わなかったことが、なぜか無性にさみしかった。小学校までたどり着いて、今度は来た道に戻って、かつて歩いた道順で歩いた。路地を抜けて、橋を渡って、ビルに囲まれた広場へ。広場の中央にはライブ用の仮設ステージが占拠していて、かつてここで大勢のひとたちが広場のなかをぐるぐる回りながら太鼓を叩いた面影はもうどこにもなかった。あの日、ここに集ったひとびとは、太鼓を手にもちなかに走るおおきな通りを練り歩いたのだった。ゆっくりと。竹むように。おなじ通りを、太鼓も持たずひとり歩く。あの日、行き過ぎるまちのひとたちの表情があんなにはっきりみえたのに、ひとり歩くときだれの顔もモザイクがかかったかのようにぼんやりとしている。気づくと歩く速度がはやくなっている。なにかにとめどなく流されるように。まちの明かりから逃れるように。はやくどこかへ迷い込んでしまいたい。

うろ覚えのまちをひとり夜あるき迷えなかったことのさみしさ

まちを歩く。

いつかの新宿。あるいはいつかの渋谷。交差点にはあいかわらずひとがいっぱいで、こんなにひとがたくさん居るとますますひとりになってしまう。まだ愛媛に居た頃、新宿も渋谷もテレビの向こう側の世界でしかなかった。自分はいま、その世界のなかに立っている。でも、同時にその世界に自分は存在していないという覚束なさに襲われる。テレビのあちら側からあのひとがみている。夢のなかから覗かれているように。でもこちらからあのひとの姿はみえない。どこかでねじれてしまって、みえてたはずなのに、あちらがみえない。あのひとの存在しない世界。この先もずっと。歩いても歩いても。

鯨がおまえを夢のなかから覗いている

歩けども歩けども鯨の夢を抜け出せずきみのなき世の夕暮れに居る

ひとがいっぱいいるますますひとりになる

ひとひとひとひとひとひとひと
ひとひとひとひとひとひとひと
ひとひとりひとひとひとひとひと
ひとひとひとひとひとひとひと
ひとひとひとひとひとひとひと

※

「丸太おばさんがしんだ。〈手放すのが怖い〉ということばを残して。丸太おばさんが抱いていたのは、ほんとうに丸太だったのだろうか。丸太おばさんの家の明かりが消えていく瞬間が引きの映像で映し出される。家の背後には夜の森が鬱蒼と繁っていて、まるでさざなみのように闇のなかを風にゆれている。丸太おばさんが抱いていたものを、わたしも抱きたかった。やさしさではなく。残酷。生きることは残酷で、だからこそみんな丸太を必要としていた。だけど、丸太と会話できたのは丸太おばさんだけだった。いつまでも聴こえない声。みんな抱いてるつもりでい

て、ほんとうは喉元を締め上げているだけなのかもしれない。手放すこともできずに。締め殺された声。丸太おぼさんの丸太は、あれからどこへいったんだろう。」

※

まちを歩く。

夕暮れ。三鷹に戻る頃には陽が落ちかけている。関東平野の夕焼けは地元でみる夕焼けに比べて色が薄くてしろい。関東に来てまずそのことに驚いた。山に囲まれた故郷の夕焼けは、夕陽が山の影になるためかもっと色が濃く、日によっては橙というより黒に近い色になる。影が燃え上がるように。

年末年始に実家へ帰省した。たくさん歩くつもりだったのに、気づけば自分の部屋に引き籠ってばかりいた。年に数回しか使われない部屋。それでもその空間はまだ自分のものだった。持ち主が不在のまま。それとも、いつか手放す瞬間が来るのだろうか。年が明けて二日目の夕暮れ、南側の窓を開けて、ベランダから西の空を眺める。夕焼けが一層濃くなる瞬間があり、それもすぐに過ぎ去って、瞬く間に闇に包まれる。さっきそこでゆらめいていた影が、闇のなかに消えてなくなる。ないものとしての竹まいがそこにはある。半月が空の高いところに貼りついている。

冬の月さっきの影がそこにはない

まちを歩く速度でことばを紡ぐ。

東京に越してきて以来住みつづけているアパートに帰り着く。東京に来て5年。ここを引き払えば、この部屋はすぐさま他のだれかの空間になる。来年で契約が切れる。留まるか、離れるか。どちらにせよ、〈自分〉という空間からは離れることはできない。

夜。すっかり暗くなった部屋に明かりも点けずに横たわる。「おまえみたいな人の気持ちの分からない人間の書く言葉なんて薄っぺらだと思っただけですけど。」前の会社を辞める際に言われたコトバが頭から離れない。いまだかつてゆるせたものなどなにかあったらどうか。あのひとの死から離れられない。歩いてても歩いてても。近

道をすることはできても、歩くという行為そのものを省略するわけにはいかない。右足が出れば左足が出るし、左足が出れば右足が出る。そのくりかえし。くりかえし。くりかえし湧き出す怒りといっしょに夜の闇に沈み込み、未明を待つ。夜でも朝でもない時間。さなぎのように変化する時間を歩きつづける。旅立ちに似て。朝焼けが燃えてまちを濃い影で象れば、きっと雨が降るだろう。

きみのなき世や 寒昴むしり取り朝焼けに溶かしてつくる雨

ゆるせないものをいくつも携えてそれを〈未明〉と名づけ旅立つ

※

「いま目の前に幽霊が現れて私のこと呪い殺そうとしたって、私逆にその幽霊のこと呪い殺せるわ。それくらい怒ってるし、それほどまでにすべてのことがゆるせないんだわ、私。」あの子はそう言ってにっと笑った。あの子の笑顔はいま黒縁の額に押し込められて線香のにおいと煙に毎日さらされている。けっきょくあの子はだれのことも殺すことはなかった。あの子自身を除いて。あの子が幽霊となって現れたことはいまのところない。

いまだかつて、ひとつでも、ゆるせたものなどあったらどうか？ ゆるすことが人間の美徳だというのなら、教えてほしい、けっしてゆるすことができないものを抱えた人間は、それでもはたして人間なのだろうか。なにかをゆるすことができない人間は、ただの獣なのだろうか。

飛ぶことができない翼しか持つことのできなかったあの子を、飛ばざるを得ないように押しやったすべてをわたしはゆるさない。わたしたちはそうやって中途半端な翼を持った獣であることでしか自分を守る術をしなかった。飛べない翼をばたつかせている姿は、どこかダンスのようでもあった。ダンスは祈りに似ていた。わたしはただ救われたかった。わたしが救われれば、あの子も救われるような気がしていた。わたしたちは空へ飛び立つまでの間、ただダンスを踊った。空はとおくて

あかるかった。夏だった。」

LOVE & PEACE 鶏が羽ばたき大空へ飛び立つまで ダンスを

LOVE & PEACE.

Dance,

until the chicken flapping

own wings fly

to the sky.

※丸太おばさん…『ツイン・ピークス』(ABC、1990年4月-1991年6月放送)の登場人物

Profile

高須賀 真之(たかすか・まさゆき)

1989(平成元年)年、愛媛県生まれ。ふじのくにマゼikai演劇祭2017およびSPAC 秋→春のシーズン2018-2019の劇評コンクールで最優秀賞。第22回シアターアーツ賞佳作。小部屋句会(佐藤文香主宰)に参加。2015年より東京在住。

富樫 朱梨

「書ける人」だけに、書いてしまう。だけど本当に書かなきゃいけないことは何なのか。最終回でようやく言葉を探り当ててくれた時、他のメンバーも涙しましたね。命かけて書いてくれたことに、敬意と感謝を。

《開》への習作

アートこそが、彼らを解き放つのではないか。そんなことを考えて、私は大股でひょいと福祉の門を跨いだのだった。障害と言われる中でも、学習障害を除く発達障害（広汎性発達障害、自閉スペクトラム症、注意欠陥・多動性障害）、ダウン症候群をはじめ、様々な名称を持つ子どもたちが通う放課後等デイサービスである。とりわけ私の部署は、知的障害を伴う子が多いことも特徴である。入ってみて数ヶ月、職場に慣れ仕事に慣れた頃になってふと俯瞰して感じたことは、この子たちは何にも縛られてはいないということだった。解き放たれている。きっと彼らは《開》の人なのではないだろうか。

明け方にすっかり過ぎた台風は交通機関へのダメージを置き土産に、澄んだ顔をしていた。昨夜はそう、ごうごうと風が窓を叩いていたことを思い出す。電車は通常でもラッシュを迎える通勤時間帯によりやく復旧したために、改札の外まで人々が溢れ崩れ出てきている。やっとなり乗り込むも、他者のカタマリは雪崩れてとまらない。Aは車内端の端まで追い詰められ、僅かな隙に原型を壊し、挟まってようやく息を凝らす。発車直前、ドアの溜息と一緒に駄目押しでまたググッと押し込められた。その瞬間。パチン！何かが弾けた。叫びだすほどの恐怖。恐怖、恐怖。閉じた感覚のほんの些細な隙間から、それは入ってきてしまったのだった。Aは言った。一度そういうものを持ってしまったらもう、そいつはもうどうしようもなく私の中にいるのだ、と。人間というものは、ほんとうに奇跡的なバランスでもっ

て、どうにか保っている。その日からAは仕事に来なくなった。

感覚を開閉すること。自分の意思を置いてきてまでそれを自在にコントロールできることが、当然の初期能力として強要されているように思えてならない。満員電車をやり過ごすとき、私はもう必然で《閉》の状態に為らざるを得ないのだった。数ミリの隙もないくらいピッタと閉じて、私は私であることを放棄する。もしもほんの僅かな不具合で、閉じることがカンゼンでなかったならば——両の手を一度だけぐっと握ってから、少し息をはいた。ガラガラの車内では吊革が均衡を保って揺れている。広告を見上げると、どこから見ても可愛いらしい女の子が、缶チューハイを手に笑っていた。求められるものだけがほんとうに価値なのだろうか。必要とされることだけが、今までに見たことのないもの、新しい何か、イノベーション、それに多様性？

ぐるぐるの思考をどうにかしたくて、とりあえずiPhoneを点ける。情報はどこもかしこもとにかく溢れている。その享受一つにおいても、満員電車と同様の開閉が必須だ。開けては閉じて、また閉じて、通り過ぎる日々にはもうとっくに追いつてはいなかった。そうして遂に、いつも閉じていないと生きていけなくなった。果てしない意識の下層で、すでに息をすることと同じ意味を持って閉じている。なにかがおかしい。もうなんとなく、なんとなくだけれど、このままでは生きていけないような気がしている。

日々の子もたちの顔を思い出す。彼らと私の違いを敢えて挙げるのならば、彼らは《開》の人で、私は《閉》の人なのだ。私たちは、きっと。座席が埋まってきた頃、右隣にヘッドフォンをつけた大柄な男性が掛けた。真っ直ぐの姿勢のままで、じっと目を瞑っている。「自分の世界に入る」みたいなことは、他者から見て閉じている状態のように思っていた。けれども。

転倒したプラレールを見つめ、Bの時は止まっているようにみえた。そろそろ、大好きな電車での外出活動の時間だ。車両を片付けて、準備しよっか。声をかけられるも、すらりと長い身体を折りたたんだ格好のままで、彼の視線は回るタイヤを捉え続けている。片付けしよっか。今日はなんと一、電車でお出かけです！浜松

町駅に行って、東京タワー！行く人はまず片付けだよ。静かに緊迫感を増す声は、相手を見失って儂く霞むばかり。間に合わなくなるよ。ああ、置いていかれちゃうかな。肩を叩いても手を引いても彼は動く気配がない。じゃあ、そうだなー電車は私が片付けよう。ほらもう準備しないと間に合わない！大袈裟に上着とリュックを持ってきて、袖口をBに向ける。びくりとも動かない。しばし不安になり、私も隣で似たように停止していた。針は動き続ける。程なくして、前触れなくフツと立ち上がった彼は目の前を素通りし、まずは丁寧に車両を片付けた。表情を変えずにもとの位置に戻ると、私を置き去りのままひょいと上着を羽織り、テキパキと荷支度を済ませたのだった。無事に出発してからまた問いかける。今日はなに駅に行くんだっけ？ハマ、マツ。そう浜松町駅ね。何を見るの？Bは少しだけ高い声で応えた。トウ、キョウ、タワー。

他を遮断しているわけでも、拒絶しているわけでもない。知覚し、認めた上での選択を行なっている。意思を持って。周囲に振り回されることなく、今！正に逃したくないその感覚を十二分に味わうことが何よりも大切だったのである。おそらくBは間に合うギリギリのラインまでもよくわかっている。きっと、それでいいんだなあ、と思う。眼前で一様に揺れながら、スマートフォンに首を落とす人々を見てはまた、そう思う。私の首だってそこに漏れずに並んでいる。場の空気を読むこと、集団に馴染むこと、仕事をもらってお金を稼ぐことなんかを生きるための知恵として捉えてきた私にとって、そういう社会に暮らすしか能のない私にとっては、《開》の人の行動はとても真似できない高等テクニックなのだ。少しだけ既存の前提を疑ってみたっていい。素直になったって。それでも生きていけるのだと、Bは率直にみせてくれる。もっとずっと一緒にいたい。彼をもっと知りたい。盗みたいことが彼の中にこそある。こんな考えは、発達支援という枠からは外れてしまう思考かもしれない——だからこそ、支援とは別の道を見つけようと思う。

電車を早めに切り上げて、田端駅で降りた。乗り換え以外で利用するのは初めてだった。少し歩きたい。もう少し考えていたい。支援に対する考え方は、ほんとうに人それぞれであるものだけど、大きく捉えた時には「この社会で生きていく

ために」ということが主軸になっているだろう。衣食住のため働きに出ること。他人に迷惑をかけないこと。最低限のルールという暗黙を守れるようにならなければいけない。それらはとても重要なことだと思う。この社会においては。

充分であるかどうかはさておき、《開》の日常を取り囲む様々な福祉現場において、発達支援を目的とするものは増えている。家庭、学校、遊びの場、生活のほぼ全てが支援の下にあると言っても過言ではない。必要なだろう。まだもう少しばらばらは、この社会の仕組みは変わらずに続くだろうから。生まれて死ぬまでまだ、この社会なのだろうから。ただ、他者を侵害しないためのルールが、今では得てして個人を差し置いた上に成り立っていることを否定できないのだ。支援がすなわち、閉じ方を学ぶことに収束してしまうのならば、この未来を今のうちに断絶しておきたいと思う。しゃかい、しゃかい。もしも「社会」のかたちが既存のそれでなかったなら、もっとこう、何かが、違っていただろうか——私なんかより《開》である彼らの方が断然「生きる」の傍にるように思えてならないのだ。《閉》の私の方こそ、彼らによって支援されることを望んでいる。改めて自分が無力であることに佇み、小石をケツと蹴りたくなっただけけれど、沈んだアスファルトではそんなことも叶わなかった。

《開》と《閉》はどちらに偏りすぎても、きっと苦しい。開けっ放しの《開》の人も、それゆえに苦しんでいることが少なくない。例えば、感覚過敏だろうか。トラックがすぐ横を過ぎ去り、路傍の木の葉がざわざわと揺れた。当たり前前に頭部にぶら下がっている、この両耳ステレオの音量が唐突に「大」へと振り切れる様を想像する。こんな走行音一つが脳天に突き刺さり、Aのように何かが私の中にも入り込むのだろう。偏るということは、きっとそういうことだ。《閉》の人ならば、閉じる為にどうするか。と、容易に考えてしまう。しかし、生き辛さを回避するために必要なのは、《閉》になっていくことではない。生まれついてごく自然に備わっていた《開》の、使い方を探していくことなのではないだろうか。手掛りは、ゆくりなく生活の其処此処にコロんと落ちていくような気がしてならない。見つけることはこの上なく難しいけれども。

それがたとえこの社会にはそぐわない手段だったとしても、必要なのだ。私にとって、どうしても必要なのだ。だから、支援の方は誰かにお願いしたい。私は社会

の代わりをつくろう。思い立ったら春の終わる匂いがして、ふと見上げたくなった。公園とも呼びきれない猫の額に寄り道して、ベンチに腰掛け空に描いてみる。どこか違ったバランスで成り立つミニマムな集団を。イメージするのは、家族みたいなもの。でも、家族ともまったく異なる何か。それぞれが日々、この社会から帰ってきたときに《開》で居られる場所がほしいのだ。背中ではか語らない《開》の後を、私は追い続けていきたい。ただの時間をかけることだって必要である気がしている。何もない様な時間こそ。きっと、人と人さえいれば、お互いはお互いに対して、それとなく確実に影響することができるから。

私はまた歩き出す。約束の時間まで、あと20分。ちょうど良い頃合いだ。Cは今年、高校を卒業し社会人になった。清掃の仕事を、それはもう張り切ってやっているらしい。

卒業までまだ数ヶ月を残し、その冬最初の冷たい風の日、Cは言った。お休みの日に、一緒に遊びたいです。と。嬉しくて嬉しくて、私は言葉に詰まった。どうにか「卒業してから」という約束を取り付けて、緩んだ口元を隠すのに必死だった。卒業後のことは考えないようにしていた。今回のような申し出がなければ、個人として会える機会は無いに等しい。彼女の存在が感じられない日々が想像もつかなかった。そんなこと、少しも。たぶん私の方が、この日を心待ちにしていたらう。約束のおかげで、桜の季節をようやくやり過ごすことができたのだった。お喋りなCは、いつだって私にたくさんの質問を投げかける。いや、どちらかというところマシガンで撃ってくる。息継ぎの間もなく。朝は何時に起きましたか？朝起きたら何をしましたか？朝ご飯は何でしたか？何分に家を出ましたか？京王線は座れましたか？座って何をしましたか？今日の出勤は何時ですか？お昼は何でしたか？それはどうしてなの～？一つの質問に答え終わるまで永遠と同じ質問をし続け、他の誰かと話していることもお構いなしだったりするものだから、私はいつも感心してしまう。こちらだって合間に、彼女への質問を繰り返してみる。問われた内容をそのまま全て返してみたこともある。あなたのことだって教えてほしいのだ。Cは光の速さですべての返答をし、構わずまた私への質問を切り出す。いつだって敵わなかった。視覚にも障害を持つ彼女は、そうやって個人から回答を集

めることで、視覚情報を補うように他者像を作り上げているのではないかと思うのだ。もう確実に誰よりも、私の生活を熟知している。叶うならば、Cの中にある「私」像をみてみたい。もしかしたら、彼女の中で3Dプリンターみたいに積み上げ作られていく像こそが、ほんとうの私なのかもしれない。なんて考えてみて、ど～かな～?なの～?彼女の陽気な声が過ぎった。もう、愛おしくて仕方がない。それがどれだけ私を開いてくれたことか。

あの角を曲がればもう、彼女の自宅だ。Cとこれからも一緒に過ごせるための方法を、私はずっと考えていたのだ。Cが暮らしたいと思える場所をつくること。Cの家族が安心して送り出せる場所にする。すべては、これに向けての仮説に過ぎない。彼女が暮らす、この東京で私自身が生きていくために。今日こそは、私も負けじと質問するのだ。彼女が立てた本日のスケジュールを味わいながら、彼女の将来についてを。電車とバスを乗り継いで、まずは原宿へ行きます。始めにタピオカを飲み、買い物をしてから、私の家で一緒にハンバーグを作ります。食後はとっておきのレモンティーで締めます。らしい。そんな1日の始まりに、この上なく胸躍らせてわくわくしている。

Profile

富樫 朱梨(とがし・あかり)

美術書籍店に勤務しながら都内外のアートイベントや芸術祭の運営・広報業務に携わる。デザイン関連企業でPMを務めた後、体調不良での休職を転機に発達障害を持つ子どもに関わる社会福祉法人へ転職。ホームか何かの設立の為、日々子どもたちと楽しく遊ぶ。

中村 須美子

いつも忙しそうな中村さん。なかなか会えませんでした。書き上げてくださってありがとうございます。願わくば顔を合わせて一緒にややもやししながら、もっと重箱の隅をつつきたかったですね。いつかまた、どこかで。

東京という名のノマディック(遊牧)

2017年から始まった、私のアートを言葉で紡ぐ旅。2年という歳月を経て、おぼろげながら見えてきたものがある。それを「書く」という作業を通して、改めて見直していこうと思う。

まず、東京アートポイント計画に応募するとしたらという立ち位置に自分を置き、そのための〈助走編〉とした。アートプロジェクトを企画する目線で、「書く」ためのリサーチを試みたのだ。そこで、改めて「アートプロジェクト」や「東京アートポイント計画」とは一体何なのかという問いに立ち返るため、『これからの文化を「10年単位」で語るために』を読み進めた。そこはまさに情報の宝庫だった。

そもそも東京アートポイント計画は、2016年オリンピック・パラリンピック競技大会招致をきっかけに、文化戦略の一環として立ち上がったものだったということを初めて知った。2012年ロンドンオリンピックで「文化プログラム」が重視されたのを機に、アートプロジェクトへの熱が高まっていく。そう、まさに2020年東京オリンピックの開催だ。だからこそ、なぜ、いま、東京でつくるのかという問いが生きてくるのだろう。

東京のあちこちに、「見世」や「屋台」のような小さな活動拠点ができ、「千の結び目」をつくるという、新しい文化事業としてスタートした東京アートポイント計画。その思いや成り立ちを知ることは、「東京でつくるということ」の意味を深く考えさせられることとなった。

「アート」と言えば、絵画の鑑賞や、彫刻を作るなどのイメージが強いが、受け

身だけではなく、参加・創造する能動的なものが増え、より身近なものへと変化してきた。その役割を果たしてきたのが、アートプロジェクトといえるだろう。

私自身アウトリーチに参加をするようになり、楽しさを知った。しかしその内「もやもや」を抱えるようになっていった。この「もやもや」をなんとかしたくて、TARLの思考と技術と対話の学校「言葉を紡ぐ」を受講した。講座のなかで現代アートに触れると新たな「もやもや」が生まれ、苛立ちが募った。しかし講座が終盤へ差し掛かったときに藤浩志さんのお話を聞いて、ストンと腑に落ちたのだ。「もやもや」は言語化することができない無意識のもの。だから抱え続けていていいものなのだ。

今回『アートプロジェクトを紡ぐ』を読んで、改めてそのことを再認識した。記録として残す、「書く」ということの重要性を強く感じた瞬間だった。特にアートの場合は、体験してすぐに分かるというよりも、時間をかけて、まるでワインが熟成するように、腑に落ちるまでに十分な時間が必要なのだと思う。だからこそ、「書く」という行為が意味を持つのだ。

そして、この「もやもや」は何なのかと改めて自分に問いかけたときに出てきたものは、「新しい価値観」だった。人は自分が持っていない、知らない価値観に出会ったときに無意識に違和感を覚えて「もやもや」するのではないだろうか。言葉にも形にもなっていないので、それを表現することは難しい。しかし確実に起こっている自分とアートとの化学反応なのだ。この化学反応こそアートプロジェクトの醍醐味なのだと思う。

今アートに求められているのは、社会課題を顕在化して可視化し、問いを投げかけることだったり、新しいコミュニティやコミュニケーションづくりだったりする。イベント的なフェスティバルではなく、人と一緒に何かをやるという「顔」が見えるプロジェクトを欲している。

東京は、もの、こと、人が多く集まる場所だ。そして、ものごとのスピードがとても速い。年々そのスピードは、加速度的に増しているようにすら感じる。生きづらさもあるけれど、生きやすくもある。そんな両側面を持った複雑な都市なのではないだろうか。カオス（混沌）な東京でつくるといことは一体どういうことなのだろう。この問いをこしばらくの間自分自身に投げかけ続けてきた。

今の社会に対して働き盛りの世代は閉塞感が、若者たちには無力感が漂う。

管理社会の息苦しさと、まさに窒息寸前。事実国連が行った国別の「世界幸福度ランキング2017」で日本は156ヵ国のうち51位、2018年にはさらに順位を落とし54位だった。

2017年厚生労働省は、世界各国の自殺死亡率(=人口10万人当たりの自殺者数)を比較した分析結果をまとめたが、日本はワースト6位だった。続く2018年、15~39歳の死因第一位は「自殺」で、15~34歳の若年層での死因第一位が「自殺」というのは、先進国では日本のみという衝撃的な事実がもたらされた。少子高齢化が進み、縮小していく社会のなか、他人事ではなく自分事として向き合う時がきている。ともすれば重く沈みがちなこともアートを介することで、一筋の光が見えてくるかもしれない。そうアートとは、「行動」すること。行動し、持続させなければ、なにも変わらないのだ。ちょっと先の未来に変化を起こすために、アートを介して一人ひとりが自分事の課題や気になることを表現すれば、それはすごい力となって持続可能な活動へとつながっていく可能性を秘めている。そのチャンスが今私達にはあるのだ。それを日本の縮図であるこの東京という場所で同時多発的に行うことは、とても意味のあることだと思う。今こそたくさんの種まきをしよう。

今私がこの東京でできる種まきはなんだろうかと考えてみる。「共生社会」「多様性」「地域の活性化」などキーワードはたくさんあるが、私の心に響いたのは「移民」。フィールドワークの「Oeshiki Project ツアーパフォーマンス《BEAT》」で出会ったベトナムの女の子、多文化ボランティア講座で知った外国人の本音、イギリスのアーティストによる「移民・難民ワークショップ・ファシリテーション」の受講と、意図せずこのキーワードに関連する体験が続いたのだ。そして、従来のやむにやまれぬ事情だけではなく、より良い場所を求めて色々な国を移動する人が一定数いることがわかった。今国際的な流動性が高まっているのだ。それは日本人も例外ではない。

2019年2月にヤフーとインドのホテル運営会社が合弁会社「OYO(オヨ)」を設立し、話題となった。「旅するように暮らす」というコンセプトに魅力を感じた人は多かったはずだ。その後似たような事業がクラウドファンディングで成立するなど、その勢いは止まらない。かくいう私も魅せられた一人だ。ずっと以前から東京(=やりたいことをするために住むまち)と本当に住みたいまちの両方を持ちたいと願い続けてきたからだ。それが比較的簡単に叶う道が現れたのだ。以前は考

えられなかったことが、どんどん現実化してきている。

働き方改革がスタートし、テレワークが推進されるなど、一極集中から地域活性化へ、子育てや介護、病気など様々な事情で在宅勤務を望む人達にとっても嬉しい変化となりつつある。今まさにライフスタイルが大きく変わろうとしているのだ。これらを後押しに、アートを介するとおもしろい化学反応が起こるのではないだろうか。

ノマド（遊牧民）のようにその時その時住みたい所に住んで生活する。あるいはひとつの所にずっと住み続けて暮らす。そのどちらでも自分で自由に選択することができる。一番重要なのは、住む場所にアートポイントをつくることだ。OYOのように移動して住むことが容易になれば、その場所その場所に、アーティストやノマド市民、地域の人々など、それぞれ違う立場の人達が一緒に何かをやる場をつくるのは実現可能だと思う。ひとつできればそこが指標となり、自ずと全国各地にたくさんのアートポイントができていこう。東京と地域との循環型社会になり、そこには新しいビジネスや雇用が生まれるなど、思いもよらないたくさんの化学反応が起こる可能性がある。そんなわくわくする妄想が私の中で止まらない。

東京と地域との循環型社会へのチャッカマン的な仕掛けをつくり、聖火のような火を灯し続けることが、私の考える東京でつくるといふことなのかもしれない。

Profile

中村 須美子（なかもら・すみこ）

“この「もやもや」をどうすればいいの!?” から始まった、アートプロジェクトへの旅。まだまだ道半ばなものの、アートの奥深さに魅せられ、可能性を信じている、身体表現者。

矢内 純子 (すーすー)

すーすーさんはその場にいるだけで、ひだまりのような引力を持っていて。その存在感を支えていたのは、壮絶な体験と覚悟だったのだと、エッセイを読んだ今、感じています。そういえば、引力は重力の一部だった。

センス・オブ・ワンダー

その日は強めの日差しが少しまぶしくて、地面に描かれた雲の影だけでなく、どんなものの影や輪郭もくっきりしていた。

ふと気がつくと、私は緩やかな動きが、陽の光を浴びてマーブル模様に反射する水のほりにいた。その状況に馴染んでから辺りを見回すと、よく知っている（気がしてならない）人が近くに座っていた。

SUE (スウ、以下S): あれ? だれだっけ?

S: えっ、もしかしたら、レイチェル・カーソルさんですか?

RACHEL (レイチェル、以下R): そう、わたしよ。SUE あなたに会いに来たの。

S: でも、どうしてこちらに?

R: 今日はあなたに呼ばれて来ましたよ。最近私の「伝記」^{*1}を何度も何度も読み直しているでしょ?

S: え? そんなことをご存知なのですか?

S: 私、あなたにお断りもせずに、メインの別荘^{*2}に伺ったことがあるんです。

R: もちろん知っていましたよ。大変な時期^{*3}にはるばるよくいらしたわね、私も長い間あなたが来るのを待っていたのよ。

S: ..本当に……?

S:最初は、ただメインの海を見てみたいだけだったんです。あなたに会いたかったのだけど、どこに行けば良いのか、全然知らなかったから。メインの海がどんな色なのかをずっと知りたかったし、そこなら海が繋がっているからそれでいいと思ったんです。

R:でもあの時、あなたは、本気で自分がいなくなる場所を探していましたね。だから銃を構えた兵士がいる飛行機^{※4}にも平気で乗ってきたし、ひとりでボストンからサウスポートまで、全く知らない土地を170マイルも運転してきたのだと思うわ。

S:絶望したのでも、行き詰まったのでもなかったのだけれど、あえて言葉にするならもういいかなという感じだったのだと思う。病気と闘うのも、身体に安全な食べ物^{※5}を探すのも、切れ切れのキャリアでも人並のことをしたいとがんばるのも、その明確な目的が見えなくなって「中途半端な時期」だったから、あなたに相談したかった。

R:ずうっと私のところに來たがっていましたね。

S:だって敬愛していたし、憧れていたんですもの。何より会ってお話があった。小さい頃から自然や生き物の素晴らしさを伝えるために、絵を添えた文章が書けたらなあと思っていたんです。

R:絵は便利だし、とても重要よね。私も挿絵画家を選ぶ時は真剣だったわ。よく観察された絵があれば見たことがないものも、形や色から直感的に知ることができでしょ?それにもし難しい字が読めなくても、捕まえた小さな虫や花と同じものが見つければ、名前を共有できるし。

※1:伝記「レイチェル (RACHEL CARSON *Witness for Nature*)」(OwlBooks)の著者は、ジョージワシントン大学で環境史を講ずるリンダ・レア教授。1997年9月、10年の歳月をかけて出版された。日本語訳は、「沈黙の春 (Silent Spring, Houghton Mifflin, 1962)」出版40周年の2002年8月出版。日本レイチェルカーソン協会長で、エッセイスト、カーソンの本を多く訳した上遠恵子さんが親愛の情を込めて「レイチェル—レイチェル・カーソン『沈黙の春』の生涯」(東京書籍)とした。表紙は「センス・オブ・ワンダー」(新潮社、1996年)の映画化に協力した自然写真家・森本二郎氏の撮ったメインの紅葉の写真が使われた。

※2:メイン州サウスポートに現存。

※3:2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ(9.11)の一月後。

※4:ユナイテッド機の客室は、銃を構えた迷彩服姿の兵士の管理下で飛行していた。

※5:食物アレルギー症状が悪化したため、摂取できるものが極端に少なかった。

S:でも文字や言葉を学べば、もっと多くのことを知ることができると思うわ。難解だと言われている能も「少しの予習」で、もっと奥深さや楽しみを手に入れられると日本の能楽師^{*6}が言っています。

R:そうね、確かに知識は楽しさに深みや広がりを与えてくれるわね。

R:でも私は、名前を知ったり生態や分布についての知識を得るよりも、もっと大事なことがあると言っていなかったかしら？

S:はい、「センス・オブ・ワンダー」^{*7}のことですね。きれいな羽の蝶や、春になるとそっと咲き出す可憐な花や、森の中で姿は見えないけれども聞こえてくる小鳥のさえずりなどに心を躍らせる感性のことですね。

R:そうそう。あなたはどこを歩いても、そういう「何か素敵なもの」を見つけて立ち止まってしまう、道草の名人ね。だけど、こどもの頃は、あまり図鑑を使っていなかったわね。この頃はあんまり絵も描かないの？

S:だって昔の植物や昆虫の図鑑の絵は干からびていて、すべすべの葉の触り具合も、手の中の虫がピクピクする驚くほどの躍動感も感じられなかったから。

S:今はネットで、だれかが調べてまとめてくれた知識を簡単に得られます。でも自分で育てた植物の絵を描いたり、スマホに小さな虫眼鏡レンズを付けて、小さなミジンコを観察して撮ったりするのは楽しいです。

R:今も自分の表現をしたいと思っているのね、安心したわ。あなたはこれからも a singer and songwriter (シンガーソングライター)ならぬ、a painter and science reporter (絵を描く科学記者)を目指すべきだわ！

S:わーい！最大の応援をありがとうございます。きれいな園芸種の花だけでなく、野で咲く小さな花や虫に食われた葉っぱ、枯れたり衰えていく姿にも美しさがあるし、かえて生命の尊厳が感じられると思っているから、そういうものを表現し続けたいわ。

S:ところでRACHEL、あなたは、入念にリサーチし、データをとり、それを骨格にして文章を書く、でもそれは正確だけれど動かない標本のようなものではなくて、自然や生命の生き生きとした素晴らしさが伝わってきます。

R:それはね、私が自然を愛して止まないから、そしてその大切な自然が、私たちが生きて行く大切な環境^{*8}としていつまでも守られるようにいつも祈っているからの。『沈黙の春』^{*9}もその気持ちがなければとても書きあげられなかったと思うわ。

S:あなたはほんとうに詩人で預言者^{※10}ですね、RACHEL!

S:ねえ RACHEL、私はあなたが病気になったり、公的な仕事や家族のためにたくさん時間を使う必要がなくて、もっとあなた自身が書きたいテーマの執筆をする時間があつたら、どんなによかったかしらと思ってきたんです。きっとあなたも、ずっとそう思っていたらいいのでしょうか？

R:そうね、そのことで悩まなかったと言えば嘘になるわね。でもね、今はわかるの。人生の長さや健康状態、快適に仕事ができる環境、そんなものは関係ないということが。やりたいと思ったら、人はそっちに向かってがむしゃらに進んでいくものよ。ちょうどあなたが、最悪の時期に東海岸を北上し続けたようにね。(笑)

それから道はまっすぐでなくてもいいの、先が見えなくてもいいし、暗闇とダイアログしてもいいし、行き止まりになったら戻ってもいいし、無為に感じられる進めない時間が漕いでいくのを観察していてもいい、目的だと思って目指したものをやめてもいい、そのどれもが後になったらムダではなかったとわかるのよ。

S:それ、セレンディピティ^{※11}ってことですよ。RACHELは文学者を目指していたけれども、大学で生物学に出会って科学者を目指すことにしたんですよ。

R:そうなの、そうしたらいつの間にか二つが私の中でひとつになっていったのね。

※6:喜多流シテ方能楽師、大島輝久

※7:自然を「知る」より自然を「感じる」ことを手伝いたいというカーソンの熱意が現れている同名著書について、「地球の美しさや不思議さにひとたび気づいたならば、それについてもっと知りたくなるでしょう」と自身で述べている。

(親友の)ドロシーとスタン夫妻は「レイチェルらしさが全文にあふれている」と感じた。人々は新しいあなたを見出すでしょう? 私が初めてあった時から知っている、きらきら輝く目をした、妖精のような、気まぐれで奇抜な、私の心をひきつけて放さないあなたを。伝記「レイチェル」P.410

日本語版「センス・オブ・ワンダー」レイチェル・カーソン著、上遠恵子訳、森本二郎写真

※8:レイチェルは、人間と他の生物をとりまく自然を、はじめて「環境」という概念で説明した。

※9:殺虫剤や農薬に対する単なる告発本ではなく、野鳥の大量死のレポートを受け取った科学者として、国民も知識を共有し、より良い方法を見つける手助けになりたいという思いを込めたエッセイ。

※10:宮澤賢治「詩人は預言者でなければならない」宮澤清六「兄のトランク」筑摩書房、1991年

※11:SERENDIPITY 探しているものとは違うけれど、別の価値があるものを偶然見つけること、予想外のことを発見すること、それによって幸運をつかむこと。

あなたも病気で死にかけたことがきっかけで、新しい使命をみつけたでしょ？

S:だって自分がした回り道は、もうだれにもして欲しくなかったの。そして、自分の身体は自分の持ち物だから、「情報を得て治療法を選択することができる＝自分で守る権利も義務もある」のだということをもっと知って欲しいわ。今も受動喫煙^{*12}で呼吸器の病気が悪化したり、タバコを吸わないこどもに害が及ぶことを解決したいと強く思っているの。

R:その通りだわ、SUE。私が『沈黙の春』で言いたかったことと通じるわ。他人の行為から自分の生活や健康を守る権利は、基本的人権として保証されなければならないものよ。

S:でも、タバコの問題は、タバコ税が自治体の財源となることや、吸う人が依存状態から抜け出しにくいためになかなか進まないの。

R:成果をあせってがんばりすぎないでSUE。改革のきっかけになれば、やがて変わっていくものなの。私は公務員の経験^{*13}があるから、人々の意識が変われば、法律も変わっていくと知っているわ。私が耕した土^{*14}に、SUE世代が種を蒔く、芽が出たものをまた次世代が育てていく、それでいいの。

S:でもねRACHEL、日本では未だに地球の気候変動について楽観的だし、残留農薬^{*15}についての情報も広がらないし、「本当の死の灰」(放射能の被害)^{*16}についても語られる機会が少ないの。RACHEL、あなたは言っていたでしょ？これからは人間を含めた地球上の生物が生きていける環境を残していかなければならないって。間に合うのかしら？若いリーダーを育てるアル・ゴアさん^{*17}や何もしない大人に怒りをぶちまけたグレタ・トゥーンベリさん^{*18}のようにはできなくても、一人一人が無理しすぎずにできることはないのかしら？

R:もちろんありますとも。私たちの住んでいる地球の歴史を知ったり、自然現象や生き物のことに興味を持ち、本を読んだり観察するうちに、自然を愛おしく思う気持ちが高まると思うわ。あなたみたいに道端の苔を育てたり、ドングリや食べた果物の種を蒔いて育ててみたりするのもいいかもしれないわね。(笑)

S:種から小さな芽が出てくるのは、本当に神秘的!そういう瞬間は、すーっと自然の方が近づいてきてくれる気がします。

R:そうそう。

S:それからRACHEL、私はあなたの著書やメインの海だけでなく、エレガントな

ファッションも好きなんです。特にあの貝のブローチ（親友ドロシーから贈られ、シュバイツァー賞の授賞式につけていった）が気に入っています。あなたそのものが、神様の作られたアートだと感じ、そして私はそれに魅了されてしまっています。

R:それはありがとう、うれしいわ。生き物それぞれに魅力があることや、だれもが等しく尊重される世界の実現について、もっともっとふたりで話したいわね。

その声を心地よく聞きながら、私は飛び立ったジェット機のように一気に雲の中に飲み込まれてしまった。

もっと話していたかったのに。でもRACHELの声は今も聞こえる。

「夢で見たことは、(その人にとって)現実の体験に数えられる」^{*19}と読んだことが

※12:望まないのに他人の喫煙の煙を吸うこと。タバコの煙は1.主流煙(喫煙者が吸い込む)、2.副流煙(タバコが燃焼する煙、有害物質濃度が1よりも高い)、3.呼出煙(喫煙者の息から出る煙)に分けられ、受動喫煙では2と3を吸わされることになる。亀田メディカルセンター医療ポータルサイト(2020年3月10日閲覧)

※13:アメリカ内務省魚類野生生物局の水産生物学者として自然科学を研究(1934~1952)

※14:皆川明「せめて(この仕事を)100年続けたい、自分が(完成させたい)、ではなく(自分は土壌を作り)次の人(が種を蒔けるようにして)、続けてもらえるようにしたい」ミナペルホネン主宰『つくく』展は2019.11.16~2020.2.16東京都現代美術館。

※15:食品中に残留する農薬、国ごとに基準値が違う。

※16:東日本大震災(3.11)時に福島第一原子力発電所で発生したメルトダウンで多量の放射線物質が放出された。

※17:元アメリカ合衆国副大統領、温暖化に関するドキュメンタリー映画『不都合な真実』(デヴィス・グッゲンハイム、2006年)、「クライメート・リアリティ・プロジェクト」主催。幼少時より、母の影響でレイチェル・カーソンを尊敬している。

※18:スウェーデンの学生環境活動家。2019年国連気候行動サミットで危機を訴えた。「言葉が暴走する時代の処世術」太田光 山極寿一 集英社、2019年

※19:ピダハン(ブラジルの先住民)にとって、夢は作り事ではない。目を覚ましているときに見える世界があり、寝ているときに見える世界があるが、どちらも現実の体験なのだ。D・L・エヴェレット(著)、屋代 通子(訳)、「ピダハン——『言語本能』を超える文化と世界観」みすず書房 P.186

ある。

この「レイチェル・カーソンと私の会話」が夢の中のできごとで、だからこそ「現実の体験」だと私は確信している。

「私たちはいま、分かれ道に立っている。長い間旅してきた道は、すばらしい高速道路で、すごいスピードに酔うこともできるが私たちはだまされているのだ。そのゆきつく先は禍であり破滅だ。もうひとつの道は、あまり人もいれないが、この分かれ道を行くときにこそ、この地球の安全を守ることの出来る最後の、唯一のチャンスがあると言えよう。とにかく、どちらの道をとるか、決めなくてはならないのは私たちなのだ。」

レイチェル・カーソン『沈黙の春』新潮文庫版(青樹 築一 訳、1974年)



メインの森にて
上遠恵子
『レイチェル・カーソン その生涯』
かもがわ出版、1993年より



『センス・オブ・ワンダー』



メインの海岸で拾った貝殻



花で蜜を吸うハチ(イギリス)



サクラの紅葉



苔の森



チャリティのためのカード類



憧れの人

私は、レイチェル・カーソンを心から「敬愛」している。

今日はその話をみなさまに聞いていただきたいと思っています。

「尊敬」という敬い、離れた遠く離れたところから仰ぎ見るような気持ちだけでなく、親しみやsympathyを感じ、できればその後ろを私も追って歩きたい、という強い憧れが募る存在だ。でも。その遺志、彼女の見ていたもの、そして私が憧れたものを、ここでうまく伝えられるだろうか。

「レイチェル・カーソンに惹かれたわけ」

私は小さい頃から、自然界のことに興味があり、庭の木に登って、猫といっしょに枝の上でおやつを食べ、虫や魚を学習机の上で飼い、顕微鏡で見たものを写生するのが楽しかった。将来はアフリカアマゾンで暮らしたいと夢見たり、わかりやすい文章ときれいな図解で、生き物の世界を伝える人になりたいと思っていたので、レイチェル・カーソンを知ったとき、私のロールモデルになった。

「レイチェル・カーソンの生涯」

レイチェルは、ペンシルベニア州スプリングデールで1907年5月27日に生まれた。文学者を志して入学したペンシルベニア女子大学時代に生物学に魅せられ、生物学者を志す。(S) ジョーンズ・ホプキンス大学大学院で修士号を取得し、アメリカ連邦漁業局・魚類野生生物局の公務員として海洋生物学に関わりながら、海や海洋生物についてわかりやすく伝えるラジオ原稿や著書を書き続けた。

レイチェルは恥ずかしがり屋で自然界に興味を持つおとなしいこどもだった。

母に導かれて家の周囲の森などの、自然の素晴らしさに目覚めた。

そして「10歳の時に雑誌に初掲載された体験が、作家になりたいという夢を育ててくれた」

と後に“本物の作家”になってから回想している。

しかし、生涯のどの時点でも、彼女には生活やお金の苦労があった。

女性が科学を学ぶこと、仕事をするための環境が整っていなかった時代に、苦学をし、さらなる勉学を諦め、公務員の仕事で家族を養い続けながら原稿を書き続けた。「われらをめぐる海」のベストセラーで有名になってからは、苦手な講演や原稿依頼の手紙や電話にも追われるようになった。

さらに科学的なデータに基づいて、殺虫剤などの空中大量散布による自然環境の破壊を危惧し、市民を啓発するために著した『沈黙の春』(1962年)を出してからは、企業社会からの激烈なバッシングを受け続けるという、苦しみが増した。

それでも家族としての役割を静かに果たし、働き続けたあげく、志半ばで病(がん)に倒れ、1964年4月14日に56歳で亡くなった。

あと10年、いや5年でも生きることができたら、彼女はどんな働きをしたらどうか。もっと執筆に割く時間があったら、どんな本を残してくれたらどうか。

「レイチェル・カーソンの居たところへ」

はじめは書物だけで知っていた、遠い国のレイチェル。

自然界の素晴らしさ、特に海の中の生物についての物語に魅了され、繰り返し読んでいた。『沈黙の春』も、その詳細な資料に基づく深刻な問題に対する警告に加えて、彼女にしか書けない、自然界を歌う美しい詩のような文章が私には子守唄のように心地よかった。

ある日、『レイチェル・カーソンの感性的森』(クリストファー・マンガー、2008年)という映画を観た。突然、「私も今すぐメインの海を見にいかなくては」という思いが湧き起こった。^{*}

撮影者の森本二郎氏の人脈と、異国のたくさんの人からの好意やメールでの道案内などが奇跡的につながり、地図に載っていないメイン州の小さな別荘にたどり着くことができた。

そこは、彼女が幼いロジャーと一緒に遊び、休息し、多くの文を書き、そして最後の著書『センス・オブ・ワンダー』(Sense of Wonder, Joanna Cotler Books, 1965年)を書きあげた場所。

日本のカエデより大きな、色あざやかな葉が苔の上に散りばめられ、そこここにトウヒのちいさな実生苗が出ているこじんまりした庭を抜けると、拍子抜けするほど小さく簡素な建物が

あった。

リビングのガラス張りの窓からは、彼女がライティングを続けた時そのままの様子をそっと見ることができた。

今にも、奥からだれかが出てきて、「あなたはどなた？」と聞かれるのではないかとドキドキしてしまう。

その窓の目の前に海からの崖があり、岩の切れ目をワイルドブルーベリーの小枝につかまりながらすぐ下の水辺に降りることができる。

それにしても、海があまりにも近い。

その海の様子も、今まで見たことがないものだった。

水が引いたところは、砂ではなく貝殻が一面に敷き詰められたように重なっている。それは水の中まで続いているのだけれど、水の中はまた、すきまのないほど茂ったぬめりのある海藻でいっぱいだった。

そして、水に濡れた貝殻は、吸い込まれそうに輝く藍色をしていた。

そこは入り江の中なので波はなく、向かいに見える岬との間の海もなんだか静かで、「ひねもすのたり」という表現が思い浮かぶ。

貝殻の写真を撮り、岬までの海をスケッチするうち、静かに、やがてざわざわと海が満ちてきた。でも、陽の光はまだ力強く、立ち去りがたい。

ふと今ここを動かなければ、ここで死ぬことができるという誘惑が私を捉えた。

もう誰の役にも立てない、レイチェルの魂の場に無事行き着いた。

ただここにいれば、海が私を迎えに来てくれる。私は海に帰るのだ。

病の苦しみや、自分の不甲斐なさへの不満も消えてなくなる。

いつの間にか太陽は夕日になりかけ、風がでてきた。

私は帰ることにした。また死にに來ればいい、と言い聞かせて。

荷物をまとめ、貝殻を拾った袋をしまい、私は旅人に戻った。

あつという間に漆黒の闇になった国道を南下して、私は昨日の宿に帰った。

次の日も島に出かけた。

そして島を探検し、いろんな人と話をした。

季節外れの夏の避暑地に現れた東洋人に、みんなが興味を持った。

「何をしに来たの？」

「レイチェル・カーソンのこと調べているんです」

「へえ、それにしてもRの発音が悪いね」

「レイチェルはどんな人でしたか？」

「あんまりその名前を出さないほうが賢明だよ、今でもよく思っていない人がいるからね」

「そうなんだ」

「コーヒーのおかわりはどうだい？」

「homemadeのクッキーも食べてごらん」

「写真を撮るなら、あっちの岬にまわってごらん」

潮風がいい感じにシワを深くしたおじいちゃんたちと話し、海の写真を撮り、オークの葉やど
んぐりを拾って、私の島での二日目は平和に過ぎた。

現実社会では出会えないだれかと一緒に過ごした、宝物の二日間。

「私の事情」

取り憑かれたようにひとりで出かけていったのは、2001年9月11日の一月後。

ユナイテッドエアーの客室には、迷彩服で銃を構えた兵士が乗り込み、トイレに行くにも兵士
の許可が必要だった。

ボストンの空港は、乗客より多い数の兵士がいて過剰にピリピリしていた。

そしてハイウェイを走る車は残らず星条旗を掲げていた。

私ももちろん、小さい星条旗をレンタカーのアンテナに取り付けた。

そうまでして、私はどうして出かけていったのだろう。

その年の初め、私は仕事中の肋骨骨折で息がしづらくなり、そのために、こじらせた風邪が重
い肺炎になり、喘息の重積発作も重なって、ほんの一週間ほどの間に危うく死にかけてしまっ
たのだ。

医師が後に「near death」と書いた状態から私をもう一度現世に呼び戻してくれたものは、
音楽だった。

枕元で繰り返し流されていた、バッハのカンタータ140番『目覚めよ、われらに呼ばれる物見ら
の声あり』が、文字通り私に「目覚めなさい」と囁き続けてくれたからだ。そして私は目覚めた。

病後は食物アレルギーの悪化で、ほとんどのものを口にすることができず、衰弱したからだは、ベッドに人型をつけられないくらい軽くなっていた。

そんな時に観た映画『レイチェル・カーソンの感性の森』で、レイチェルがプライベートの時間を過ごしたメイン州にあるという別荘の映像、に強く心が惹きつけられてしまった。

もう元どおりに元気になることは叶わないのではないか、とてもレイチェルの後ろを歩く者のひとりになりたいという望みも叶いそうにない。

そう思っている私の、いわば最後の願いが、公開されていない「その地に行く」ことだったのだ。

「それからのこと」

その後も翻訳本に飽きたらず、苦勞しながら伝記や著作を読みふけていた。

身体はゆっくり回復し、私は自分と同じように病を抱える人を支援するという新たな使命を与えられた。

そして、仕事で書く記事の中に自然への愛を密かに盛り込み、患者が病気に関する知識を得たり、医療者とのコミュニケーションを学ぶための冊子にも、紙面の美しさ、わかりやすさと同時に手に取る楽しさを盛り込もうとした。

時折作る植物のカードも、本来の手触りや香りが伝わるように丁寧に描く。

それが、今私ができる彼女の道を追う、ほんのささやかな歩みだ。

「読んだことがありますか？」

レイチェルが『沈黙の春』の作者だと知っている人は多い。

「アメリカの奥深く分け入ったところに、ある町があった。生命あるものはみな、自然と一つだった。(略)春が来ると、緑の野原のかなたに、白い花のかすみがつなびき、秋になれば、カンヤカエデやカバが燃えるような紅葉のあやを織りなし(略)ところが、あるときどういう呪いを受けたのか。暗い影があたりにしびよった。(略)春がきたが、沈黙の春だった。」(青木 蓮一 訳)

この冒頭を覚えている人も多だろう。

アメリカでの発行部数は150万部以上といわれている。

地球の気候変動の問題が深刻化している今も、読み継がれている。

レイチェル・カーソンは、海洋生物学者にして、海洋生物についてのエッセイを数多く書き、その分野のベストセラー作家だった。

それが彼女の本領だった。

そんな彼女も、最初からその道を目指してはいなかった。大学で生物学に出会ったときに serendipity^{*} が起こったのだ。

その偶然が起こったので、私たちは今、科学と詩が溶け合うアート、彼女の自然を歌う本を読むことができる。

もし、『沈黙の春』の名で安易に怖そうな人、社会運動家かな？と思って敬遠していたら、メインの海や植物の写真も美しい一冊、『The Sense of Wonder^{**}』（日本語訳）を手にとってみてはいかがだろうか？

この本は彼女の最後のメッセージで、死後に友人たちの手で出版されたもの。

レイチェル自身がこのように言っている。

「こどもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。残念なことに、わたしたちの多くは大人になるまえに澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感力をにぶらせ、あるときは全く失ってしまいます。もしもわたしが、すべてのこどもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力を持っているとしたら、世界中のこどもに、生涯きえることのない『センス・オブ・ワンダー』を授けてほしいと頼むでしょう…」(上遠恵子訳)

※セレンディピティ = serendipity (探しているものとは別の価値があることを偶然見つけること、ふとした偶然をきっかけに幸運をつかみ取ること)

※※Sense of Wonder = センス オブ ワンダー (神秘さや不思議さに目をみはる感性、それを素直に感じること 上遠恵子訳)

[レイチェル・カーソン年譜] 1907.5.27～1964.4.14

1907年ペンシルベニア州スプリングデール生まれ、

文学者を志すがペンシルベニア女子大学時代に

生物学に魅せられ生物学者を志す

ジョンズ・ホプキンス大学大学院で修士号取得

アメリカ連邦漁業局・魚類野生生物局の公務員として

海洋生物学に関わる、アメリカ内務省魚類野生生物局の

海洋生物学者、1963年にシュバイツァー賞受賞

1964年4月14日死去

[著書]

1941 『潮風の下で』

1951 『われらをめぐる海』

1955 『海辺』(ベストセラー)

1962 『沈黙の春』(ニューヨーカー誌に連載後、単行本)

1964 『センス・オブ・ワンダー』

Profile

矢内 純子(やない・すみこ) / すーすー

東京生まれ、東京育ち。

小さいときから、自然の神秘や動植物が大好き!

帽子やこども服のデザイナーを経て、念願のガーデニング記事のライター兼編集者に。病気の経験を機に、患者会NPOで当事者目線での啓発活動、H-PACやみんくるカフェで地域医療政策を学ぶ。現在、地域での仲間作りの成果を堪能中。

東京という生態系

矢内 純子(すーすー)

ある晩、私はフクロウになった。
私の住んでいるのは奥深い森。
その森の奥の古木には、住み心地の良い
とびきりのねぐらがある。
大きな洞の上では、緑の葉が
折り重なる無数の枝をおおっていて、
雨や雪の心配をしたことがない。

森は広くて、狩をする獲物に
満ちている。
この森での暮らしが満ち足りていて、
私はごきげんだ。

私は特に春の森が好きだ。
春(から夏にかけて)の森では、
あちらこちらで
陽の光が地表を照らします。
それに促されて、眠っていた種や寒さに
耐えていた草花が
いっせいに動き出す。
まるで舞台のスポットライトの中で、
踊り子が目覚め、次々に舞い始めるように。
その時を待っていた虫たちが
やってくると、森の中は騒がしくなる。

花は蜜の香りで虫を誘い、
虫はその身体についた花粉を
ほかの花にプレゼントする。
そうして花は、新しい命を宿す。

東京は私の住む森。
大切なふるさと。
生きるに十分な獲物が私を養い、
鳥のさえずりや虫の羽音に
活力がわく。
緑の葉からこぼれ落ちる陽の光や、
つかの間咲いてまぼろしのように
視界から消えていく花々の、
しかし記憶には深く刻まれる
無数の色やかおりや花姿、
樹々の間を吹き抜ける風の
日々届けてくれる自然からの便りが
私を癒わせる。
雨の日には休息が与えられ、
雪が届けてくれる静寂が
私の思考を研ぎ澄ます。
私は満ち足りた気持ちで、
今もそこに住んでいる。



嘉原 妙

「待つ」という強さを身をもって示してくれる人。小さな体に宿った大きな魂に、私がいつか友人からもらった「一緒に歳をとるということは、人生で最もエキサイティングなことだ」という言葉を贈ります。ありがとう。

スタディ、スタディ、スタディ 自分の経験を辿った先にある、 「東京でつくる」ということ

東京を身体に入れる

年の瀬も迫るある夜、半年間のサバティカルを終えた友人と東京で再会した。美味しいちゃんこ鍋に舌鼓を打ちながら、ここ数年のお互いの暮らしや仕事の話をした。私が別府で暮らしていた月日より東京で暮らす方が長くなったよと彼女に言いながら、その事実で改めて自分でも驚いていた。もうすぐ、東京で暮らしはじめて5年が経とうとしているのかと。

すっかり夜も更け終電もなくなったので、家まで歩いて帰ることにした。街灯が煌々と灯る明るい東京のまちを歩きながら、ふと、ここから家までの距離が分かるくらいに、自分が暮らすまちが身体に入ってきているのだと実感した。それは、このまちで暮らしている、という実感なのだと思う。

暮らしはじめて間もなくの頃は、こんな風に歩けなかった。思い返すと、東京暮らし2年目の頃に、友人たちと一緒にはじめた東京の美味しい朝ごはんを目指し

て走るという緩やかな活動が、私と東京の距離感を捉えるきっかけだったように思う。自分の身体を使い、誰かと一緒に時間を共にしながら東京のまちを身体化していくこと。現在もその活動は続いている。毎週土曜日の朝、東京のとある場所に人々が集まり、「おはよう」と声が聞こえ、和気藹々とおしゃべりしながら走り出す。なんだか東京と出会う稽古のようなことを、気づかぬうちにしていたのかもしれない。

「東京でつくる」を考えるために、自分の経験を辿る

「東京でつくる」を考えるには、自分の経験を辿り直す必要があるんじゃないか。第2回スタディ1のワークシートを記入しながら、そんなことを考えた。なぜ、今は東京に居て、アートに携わっているのか。そもそもなぜ、アートじゃなきゃダメなのか。これまでの経験から裏支えされる答えに確信はあるものの、上手く言葉にできない。このままで「東京でつくる」なんて考えられるのだろうか。

高校2年生の美術史の授業で、表現やアート作品は、自分自身と社会（世界）を繋ぐ「窓」のような存在のようだと感じ、今、生きるアーティストの表現やアートを通して、この世界を、自分が今、何処に立っているのかを確かめたいと強く想った。それは、平々凡々とした変わり映えのしない高校生活で、じっと静かに耐える中で見つけた一筋の光のようだった。たいそう大きさに聞こえるだろうけれど、私にとっては救いだった。自分自身の視点が揺さぶられ、目の前に広がる世界はもっと奥行きがあるのだと気づかされたこと。考えや感じ方に「変化」が起こることへの戸惑いと喜び。

あの日、あの美術史の授業を受けていなかったら、今こうして、アートや表現に携わることはなかっただろうと思う。

巡り巡ってどうなるか分からないけれど、自分なりのスタディとして、これまでの経験や記憶を年表にして目の前に並べてみることにした。書き出してみると不思議なもので、忘れていた記憶が呼び起こされ、節目のときが浮かび上がってくる。以下は、自分の経験を一度自ら引き剥がし、再び引き寄せようと言葉にした思考の跡。

1995年1月17日5時46分、ごおっという地鳴りの音、突き上げるような大きな揺れ、あちこちで何かが落下し割れる音を今でもはっきりと覚えている。大きな揺れがおさまり、からからと玄関の引き戸を開ける音がした後すぐ、「寺がない...」と叫んだ祖父の声が階下から聞こえた。でも、その明け方からの記憶がほとんどない。小学3年生の冬、阪神・淡路大震災に遭い、実家のお寺が全壊した。全壊した本堂は、その後、20年の月日を経てようやく再建することができたけれど、何をもちて復興というのだろうか、と今でも考えている。

東京に来て1年目の冬、初めて東北を訪れた。東日本大震災の被災地にて、現地のNPOと共に取り組むアートプロジェクトの現場視察だった。ふと、阪神・淡路大震災の記憶がほとんどないことを一緒にいた同僚に話したことがあった。すると「忘れてることも含めて、それは覚えているってことだね」と言葉が返ってきて、はっとした。自覚的でなくても、身体が覚えていることがあるのだと肯定されたように感じたから。

東京に住み、東北に通うようになってから、かつての経験が現在の経験が重なっていくことが度々あった。それは、再びあの日の経験に自らが還っていくようでもあった。

高校1年生のある台風の日の夜、同級生からメールが届いた。友人というにはそんなに話をしたことがなかったので最初はちょっと驚いたけれど、嬉しくて何通かやりとりをしたのを覚えている。彼は、その年の秋に亡くなった。

あれから彼が生きた時間の倍の月日は私は生きている。その事実静かに驚きながら、絶望について考える。絶望を分かちもつ技術、それはアート（文化）が育むことのできるものではなかったかと。

ぼかぼかと秋の陽気を背中で受けながら、大階段を登りきり振り返ったあの日、目の前に広がる風景（遠くには右京区の山の稜線、眼下には京都の街並み）を見て、ああ、私は来年この場所に居るなと直感した。何かこうストンと腹に落ちるものがある、この大学に入学すると母に宣言した。入学後は、念願の美術史を学び、実際に京都のまちなかでギャラリーの企画運営やプロジェクトの現場に身

を置いた。こんなにも知らないことがたくさんあるのだと、未知を吸収する日々だった。

「つくる」ことを考えるとき、いつも思い出す人がいる。ある日、恒久設置する作品の説明のために、地域の方々に挨拶巡りをしていたときのこと、一人のおばあさんと出会った。彼女は、嫁いできてからこの土地に住み、早くにご主人を亡くされたらしい。その後は一人で暮らし、時々子供たちが様子を見にきてくれるのだと言う。

家の縁側に座っていた彼女は、にこにこ柔らかな笑顔で迎え入れてくれ、腰の曲がった小さな身体を起こして、どうぞお茶でも一杯と支度をしてくれた。彼女は、とても凜とした雰囲気のある人だった。

お茶を飲みながら話をしていると、同行してくれた地元の人が、白菜の苗がたくさん育ったので近々持ってくるよ、と不意に言った。「わぁ、私、白菜の苗から育てるのはじめて。いつも種からだから嬉しいわ」と応える姿を目の前で見ながら、いま、私は彼女の人生に触れてしまったのだと思った。あの彼女の表情が忘れられない。この場所でアートプロジェクトに取り組むというのは、ここで生きる人の「生」に触れていくことなのだ、改めて思い知った経験だった。

つくることは、生きること。暮らしの中に宿っていくもの。それが、彼女の生きる姿勢から教わったこと。

「財産って何やと思う？ それは、経験なんやで」。

恩師が言っていたこの言葉を、最近よく思い出している。とにかく経験を重ね、失敗したらもう一度やり直せばいいのだと教わったというのに、今、地団駄を踏みながらもやもやしているからだろう。経験は、決して他者が奪うことができないもの。とてもシンプルで難しい実践の言葉だと今ならよく分かる。

「誰か」と共に「経験」をつくること、他者とそれぞれの異なる経験を共有すること、でも、共有できないことをも知ること、そういう差異に触れられる時間と場をつくること。まだまだ漠然としているけれど、私は、根本的にはずっとそういう「経験の場」を耕していくような関わり方を探ってきたのだろう。

「つくる」ときの風景

自分の経験を辿りながら年表をつくり、自分の現在地を探ってきた。ここに居るのだと確かめるには、まだまだ時間が必要だ。もう少しの間、この辿る作業は行っていこうと思う。ただ、ひとつ気づいたのは、「つくる」ときにイメージする風景は、そんなに昔から変わっていないということだった。

場所はどこであれ、私にとって「つくる」ときの風景は、既存の枠組みを越えようとする縁に手をかけること。新しい表現のエッジにアーティストや鑑賞者／参加者と共に立つこと。そのぎりぎりの入口（時には出口かもしれない）の際まで立ち会うこと。

「東京」で「何か」をつくるとしたら、もっとそういった「入口」の実践の場をつくることなのかもしれない。アートなんて全然分からないと言う人と、分からなさを分からないままに受け止めていけるような入口を共に探っていく方法を見つけたい。揺らぎの中にこそ学びや気づきは生まれるのだから、おおいに揺らぎつつけるような環境を、どうすれば生み出せるのか。

スタディ、スタディ、スタディ。おまじないのような言葉を繰り返しながら、私のスタディは、まだまだ続く。

Profile

嘉原 妙 (よしはら・たえ)

兵庫県宝塚市生まれ、淡路島育ち。地域をフィールドにさまざまなアートプロジェクトの運営を経験。2015年よりアーツカウンシル東京 プログラムオフィサーとして、芸術文化の伴走型中間支援に携わり、東京都内で活動するNPOと共にアートプロジェクトに取り組む。

東京プロジェクトスタディ1

続・東京でつくるということ

「わたしとアートプロジェクトとの距離を記述する」

What it means to create in Tokyo 2

著者

石神 夏希／朝山 紗季／今井 亜子／佐藤 しずく

高須賀 真之／タカノ レイ／富樫 朱梨

中村 須美子／矢内 純子(すーすー)／嘉原 妙

編集

和田 安代

デザイン

ひぐち ゆきこ(lalagraph)

印刷・製本

株式会社イーステージ

発行日

令和2年3月23日

発行

公益財団法人東京都歴史文化財団

アーツカウンシル東京

〒102-0073

東京都千代田区九段北4-1-28

九段ファーストプレイス8階

TEL:03-6256-8435

FAX:03-6256-8829

<https://www.artscouncil-tokyo.jp>

※本冊子はTokyo Art Research Lab

「思考と技術と対話の学校」の一環として制作されました。

ISBN 978-4-909894-09-0 C0070

Tokyo Art Research Labとは

公益財団法人東京都歴史文化財団
アーツカウンシル東京の人材育成
事業として、アートプロジェクトを
実践する全ての人々に開かれ、共
につくりあげる学びのプログラムで
す。現場の課題に対応したスキル
の提供や開発、人材の育成を行う
ことから、社会におけるアートプロ
ジェクトの可能性を広げることを
目指しています。

<https://tarl.jp/>

書き手

朝山 沙季

石神 夏希

今井 亜子

佐藤 しずく

高須賀 真之

タカノ レイ

富樫 朱梨

中村 須美子

矢内 純子

嘉原 妙

(敬称略 五十音順)

第1回スタディ：はじめは、からだの自己紹介(2019.8.24)

第2回スタディ：「問い」に気づく(2019.9.4)

第3回スタディ：フィールドワーク(2019.9.7)

第4回スタディ：進捗共有会(2019.10.3)

第5回スタディ：Oeshikiを終えて(2019.10.26)

第6回スタディ：ゲストとの対話①(2019.11.23)

第7回スタディ：ゲストとの対話②(2019.12.7)

第8回スタディ：最後の活動日(2020.1.11)

第9回スタディ／全体共有会：朗読「続・東京でつくるということ」(2020.1.19)

ARTS COUNCIL TOKYO



tarl TOKYO ART RESEARCH LAB

文化でつながる。未来とつながる。

Tokyo.Tokyo
FESTIVAL